
Another MOON

どり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Another MOON

【Nコード】

N1521R

【作者名】

どり

【あらすじ】

2001年9月、航空機の事故が起きた。事故とされているが、実はある人物を狙った撃墜だった。それから10年後、その彼女が再び現れた……

吸血鬼である彼女が吸血鬼に墜ちた訳をラブコメ混じりで書きました、ってトコでしょうか。うゝん、最初っからこう狙っていたのなら、もう少し書きようがあった気がします。まだまだ修行が足りませんね。

初投稿になります。まだまだわかんないこと、いっぱいありますけど、何とか完結できました。ありがとうございました。

プロローグ（前書き）

元は「真月譚 月姫」のアニメ版です。自分ではアルクエイド萌小説と思ってます。でも、これを二時創作物だと思って読まれるととまどわれるかと思います。

基本設定すらも離れています。名前のよく似た人物は一人いますけど、ほぼオリジナルキャラです。ですから、期待に添えないかもしれません。あしからず。

ですから、当然、吸血鬼は出てきますが、魔眼はでてきません。あたしにそれだけの力量がありません。ごめんなさい。

プロローグ

「現地時間、2001年9月1日 23..20 記録者、フローレンス・アン・レモン・見座少尉。

天候 晴れ。視界は良好。対象はレーダーにて追跡中。対象の位置は北緯38度20分、東経139度30分。仙台市西方約80Km。高度 約7000m。速度時速 約900Kmで接近中。ほぼ推定航路上にあります。地上部隊、配備完了」

了解。攻撃タイミングはどうか。

「FIM-92ステインガー発射タイミングは約5分後です」

「・・・あの、本当に民間航空機を攻撃するのですか？同盟国とはいえ他国です。重大な国際問題になる恐れが・・・」

日本政府には演習と言うことで連絡済みだ。演習中の事故はあり得ることだよ。それに政府上層部にはそれなりに周知してある。

「しかし、あの機には300名が搭乗しています。それをたった一人のために犠牲にするなんて・・・」

その外に60億人がいることは考えてみたのかな？それに対する300人なら遙かに少ないと思えないかね？

「・・・それでも、家族や友人を考えれば、犠牲というのは。それにどうしても他の方法がないのかと・・・」

あればそれにしているのだがね。なんならこの任務から外すことが出来るが、どうするか？

「・・・いえ、続けます」

戯れ言を言っている間に時間が来たようだ。攻撃用意をさせろ。

「はい。・・・地上部隊、目標確認・・・熱赤外線、目標ロックしました。対象捕捉、いつでも発射できます」

では、発射させろ。

「は・・・はい。射撃命令確認。発射してください・・・・・・発射確認。」

赤外線モニター出ます。・・・命中。機体後部付近に命中・・・一部破損の様様」

機体後部か。直接の爆発にはならなかったのか。

「はい、しかし後部垂直尾翼破損のようです。コースが不安定になって、INS航路から外れてきています。

一部ハイドロダウンかと思われます」

油圧パイプの損失は致命傷の可能性が高いな。へたに空中爆発を起こされて広範囲に残骸が広がるよりは、墜落の方が搜索しやすいかもしれない。このまま追跡、墜落場所を確認すること。

「了解、付近を飛んでいるC-130のレーダーも応援させます。機体高度が下がってます。

ダッチロールを起こしています。迷走状態なので、進路予測が困難になっています」

パイロットの技量もあるからな。見失うなよ。ヘリも出動させろ。

「了解。横田基地、ヘリ、出ます」

墜落直後に現地到着となるように待機。目標の捕捉が最優先。やむを得ない場合は射殺も可。繰り返し。目標の捕捉あるいは射殺が最優先。人命救助は無視してよし。

「は・・・はい。目標の捕捉あるいは射殺を最優先とし、人命救助は無視」

よろしい。

「機体高度、下がります。地表面に異常接近します・・・レーダーから消えました」

C-130から報告はあるか

「確認します。・・・爆発炎上と思われる炎を確認。位置・・・来ました。ヘリに連絡します」

ヘリ誘導後、C-130は帰還。乗員には箝口令を敷いておけ。

「はい・・・ヘリ、到着予定は10分後です」

オッケー。日本のマスコミや警察に早急にかぎつけてもらっては困る。偽情報を流しておけ。到着に手間取るように。

「了解．．．．ヘリの隊長から連絡です。目標について指示願いたい．．．」

成人女性。髪は銀色。容姿は欧米人。身長170cm前後。彼女と思われる女性を発見した場合は、単独での行動は厳禁。

「．．．はい、でも死体を探すことになりますよね？」

死体ではない。推測だが、生存しているものと考えている。

「ま、まさか．．．．あれほどの飛行機事故ですよ。生存者がいるのは、奇跡に近い．．．」

私の推測どおりなら、彼女は奇跡を起こす。神に近いかもしれない。いいか、くれぐれも用心させろ。

「了解しました．．．．隊長からも確認の連絡ありました。まもなく、現地に降下します」

サーマルビジョンは使えるか？

「現地が火災直後ですから、条件としてはよくありません。スターライトスコープの方が確認しやすいかも」

それは現地にまかそう。二手に分けて、挟撃する形で搜索する。

「了解．．．．現地、降りました。指示どおり、二手に分かれます。搜索活動中」

ヘリの音には当然気がついていだろうから、どこかに隠れるだろう。十分気をつけろ。

「．．．ヘリから報告。サーマルビジョンに動きを察知したようです．．．A班の前、離れる方向で移動中、人間のようです．．．信じられない。本当に生き残っているなんて！」

追いつめろ。包囲網を狭くしていくんだ。決して焦るな。

「了解．．．動きが止まりました。反対側のB班の存在に気がついたようです。音でしょうか。どうやって気配に気づいたのか」

10mまで範囲を狭めたら、待機。投降勧告を行う。同意がない場合は発砲を許可する。

「丸腰の女性なのに．．．．いえ、投降勧告の後、発砲許可します」
彼女のことを知れば知るほど、それまでの自分が甘かったと思い

知ったよ。

「負傷しているようです。当然ですね・・・彼女と英語で会話できますか？」

どこの言葉でも自由自在だよ。日系人の君より英語はペラペラだね。

「私の英語はネイティブではありませんから・・・投降勧告、拒否されました。発砲許可します」

よし、やれ。

「発砲許可・・・え？消えた？ほんの数m前にいるはずよ？・・・隊長？」

どうした？撃たないのか？

「返事ありません。・・・心音モニター消えています。え、どういうこと？神様

・・・心音モニター全員消えています。機械の故障でなければ、全員の心臓が止まっています！

そんな、さっきまで正常に動いていたのに」

・・・全員死亡なのか？ほんの一瞬で？

「マイク、出ます。スピーカーにつなぎます」

「・・・今夜は盛大なお出迎え、ありがとう。明日、捜索隊が入る前に、関係者の死体や武器を

撤去しておいてよね。昔っからそうだけど、あんたたち、何人殺せば気が済むの」

若い女性の声。どっか小馬鹿にした響きだ。

くそっアマ！

フローレンスのヘッドホンに怒鳴り声が響いた。

10年後、墜落現場には慰霊碑が設置されていた。整備された小道ができあがり、多くの人が訪れている。

国際路線の事故であったせいか、やってくる人たちも国際色豊かだ。

そんななかでも、特に際だって美しい女性。銀色の長い髪。濃いサングラスに隠れて目は見えない。

暑い最中だが、長袖のシャツに長めのスカート。暑さより紫外線対策の方が大切なようだ。

慰霊碑に花束を捧げ、そっとおじぎをする。足早に離れようとする彼女に一人の男性が近寄った。

「失礼ですが、アルク、・・・アルクライム・レ・ファニユさんですか？」

「そちらこそ、失礼ですが・・・」

「私、外務省から来ました、有道と言います」

「外務省の方が、何のご用でしょうか？」

「今回の入国の目的を知りたいのですが」

「あら、単なる観光ではご不満ですか？」

美しい口元に笑みが浮かぶ。やりとりをおもしろがっているのかも知れない。

「普通の観光では、この事故現場まで脚を伸ばす方はまず見えられませんので。

それにもかすると・・・こちらのほうに興味があるかと思ひまして」

有道が差し出す資料に目をやるアルク。

「公式記録上、この事故の唯一の生き残りです。栃尾 智。これが彼の住所。

彼は今高校2年生で近所の高校に通っています。元気ですよ」

「それはご親切に。こんなに親切にされると、返って不安になりますわ。何か理由がありがしら」

アルクのサングラスの下の瞳が輝く。

「私としては用を済ませていただいたら、さっさと消えて欲しいからです。何事も起きないうちに。

それが私たち両方にとって幸せなことではありませんか？では、失礼します」

有道は来た道に戻っていった。アルクは少し空を見上げると、反対方向に歩き始めた。

枳尾 知くトチオ サトル＞. 1 (前書き)

話ごとに語りを替えようというチャレンジです。読みにくいとか理解しにくいとかあるかもしれませんが。お許し下さい。

柄尾 知くトチオ サトル＞・ 1

「あゝ、もうあっちいし、授業なんてうざったいぜ」

「真っ黒く、海外行ってきたの？わく、いいなあ」

夏休み明けの学校。生徒達の元気な声が響いている。

「よ、知、夏休みはどっか行ったか？」

「いや、オレ、飛行機ダメだから」

「あゝ、確かに。すまん。でもよお、やっぱ、夏は彼女作りにどっか出かけねえとなあ」

「そういうお前は、彼女できたんか？」

「あはは、もてすぎのオレになんて事を言うか！」

楽しい奴らだ。なんかホツとする。そう、ここにはオレの居場所がある。

「彼女っていやあ、知、多恵子のこと聞いたか？」

「え？多恵子って、一重ヶ根さん？」

「おう、他にいるのか？」

いや、他に多恵子って子は知らないけど。クラスでも成績がよい方で、物静かで読書してるってイメージ。悪く言えば、ちよつとクライ感じになるけど。

「その一重ヶ根さんなんだけどさあ、これ、クラスの女子に聞いたんだけど、今年のバレンタインデーにそれはそれは一生懸命に、手作りチョコ、こしらえたんだとさ。いや、こしらえようとした、か。結局、間に合わずで、市販品に切り替えたとさ」

へえ、彼女、そんな一面があったんだ。

「で、当日、そのチョコ、本命に渡せなかったんだと。あまりに恥ずかしかったんだとさ」

あはは、まあ、その相手が可哀相だな。

「その相手って、お前らしいぜ」

はあ？お、オレ？あの、一重ヶ根さんがオレのこと、好き？い、

いやあ、そう言われても、ちょっとピンとこない。

「とにかく彼女は恥ずかしがり屋らしい。男らしく、お前の方からデートに誘ってやれよ。きつとのおつてくるぜ」

「あ、い、いや、そ、そんなオレは・・・」

「別に彼女、いないんだろ。なら、いいじゃん」

ま、そりゃ、誰とデートしたっていいだけださ。すぐに話題は切り替わる。バカを言い合いながら、クラスにはいる。クラスの中でもやっぱりみんなで騒ぎ合ってる。

ちよつと一重ヶ根さんが気になる。机に座って、友人と静かに談笑してる。長いストレートの黒髪がけっこう似合ってる。

あれ？彼女、チラッとこっちを見た。いや、自意識過剰かも知れないけど、さっきの話しの後だから、どうしても気になる。

あ、また見た。やっぱりこっちを気にしてる。オレのことを気にしてるのか？や、やべえ。なんか、ドキドキしてきた。ホントに、ちよつとデート、考えてもいいな。けっこう、かわいいし、思ってた時だった。

「はいはい、静かにしてちようだい！」

ガラッと教室のドアが開く。入ってきたのは若い美人だった。だけど、え、こんな先生、見たことないぞ？

「えー、あんた達の担任だった、鼠餅先生^{ねずもち}だけど、しばらくアメリカに行くことになった。で、その後任にあたしこと、勘解由小路^{かでのこうじ}龍子が世話人なることになった。よろしくな」

えーっと言う声が教室に響いた。なんとまあ急な話で。でも、おじさんよりは若くて美人の方がうれいかなあ。しかもその姿をよく見れば、大胆なミニスカート、開け気味の胸元。けっこうボンキユッパツではないか。

「で、早速で悪いんだが、みんなのことを知りたいので、個人面談をします。一番手に栃尾 知。放課後に、面談室まで来てちようだい」

え、オレ？なんでオレ？アイウエオ順でもないし、成績順でもト

ップでも最下位でもないオレ？素行不良なのか、オレ？呆然とするオレ達を置いて、先生は言いたいことだけ言う、立ち去っていった。

クラスみんなは、口では可哀相と言いながら、ニコニコと帰っていった。特に仲のいい奴らは、あることないこと言いながらオレをからかっていく。まあ、別に取って食われるわけじゃないし、単なる面談でしょ。

面接室に入ると、先生はもう椅子に腰掛けて待っていた。高々と組んだ足がセクシーだ。

「座ってよ」

資料を読みふけて、こっちを見もしないで呼びかけてくる。黙って腰掛けると、ようやく資料から目を上げた。

「枋尾 知クン。成績も目立たず、運動も中。部活も特になく、趣味もなし？あんた、学生生活おもしろい？」

「別に先生にそう言われる事じゃないです」

「そりゃそうだけど、ここまで特徴がないとかえって目立つわね」ポリポリと頭をかくと、先生は身を乗り出してきた。開いたブラウスから胸の谷間がよく見える。

「彼女はいないの？いないんなら、あたし、相手してあげようか」

あ、あの、一応先生と生徒の関係だし、しかも、ここはまだ学校内です。

「冗談よ、冗談。で、ほんとに聞きたかったのは、こっから。10年前、航空事故でご家族をなくされているのよね」

ズキンと胸が痛む。小さくはなっているけど、いつまで経っても消えることはない痛み。

「父と母、姉が死にました。僕は奇跡的に軽傷だったと聞いています」

あの事故で、僕の家族は死んでしまった。おじさんの家に引き取られて、その子として育てられた。別になにか不自由があった訳

じゃない。本当の子供のようにかわいがってもらったし。慰謝料とかで、お金にも困ったことはなかった。

でも、時折、昔のことを思い出して泣いていた。やさしかった母さんや姉さん、厳しかったけど楽しかった父さん。そんなときにはおばさんがやさしく抱いてくれた。かあさんと同じ匂いがしてた。それでも無性に泣きたかった。ぼくの居場所はここじゃないって。

「もう、あの事故のことは覚えていないの？」

詳しいことは覚えていません。強い衝撃があったこと、強く投げ出されたこと。真っ暗闇の中で、父さんや母さんの声を聞いたような気がする。あとはひどく不味い血の味。

でも、誰にも言えない記憶がもう一つだけある。別に隠しておかなくてはいけないことでもないけど、今まで誰も信じてくれなかったから、いつの間にか、言わなくなってしまっただけ。

天使を見た。薄暗がりの中で、見上げたら、天使が立っていた。ニツコリと僕に微笑みかけてくれた、それだけの記憶。

「なにか、思い出したら、遠慮なく言ってよね」

最後までどっか軽い先生の言葉を後に、ぼくは面談室を出た。夏の長い一日も夕暮れを迎えていた。

廊下に一人で立っているのは、一重ヶ根さん。

「終わった？」

「うん……待ってくれたの？ありがとう」

「うあ、……そんな、お礼言われるようなこと、してないし……」

その後は、二人なんとなく並んで帰り始める。

「やっぱ、事故のこと、聞かれたの？」

「うん、どうしても、切り離すことができないみたい」

「しょうがないよね。ある意味、有名人だから」

「ぼくは……ぼくは、忘れちゃいたいと思ってるんだけどね。」

辛い記憶だし・・・」

一重ヶ根さんがこつちを振り向く。目には涙が光ってた。

「ご、ごめんなさい。あたし、悪いこと、言ったかしら」

「ち、違う、違うよ。一重ヶ根さんとは、全然関係ないっから！」

や、やべー、女の子の涙なんて、ど、どうする？悪友の言葉が不意にひらめく。デートさそっちまったら。

「あ、あの、一重ヶ根さん、土曜日、暇？」

「え？」

「い、いや、オレ、いや、ぼく、暇で、することないし、そ、そのお互い暇なら、その、どっか行かない？」

「あ・・・はい、暇です。行きます！」

泣き顔が一瞬で笑顔になった。破顔一笑ってこれなんかなあ。なんかいいなあ。明日、ゲームセンターで落ち合うことにする。笑顔で手を振る彼女を見るのが、なんかとってもうれしかった。

「ちゃっかり仲良しがいるんじゃないの。まあ、調査書なんて当てにならないもんだけど」

連れだって校庭を歩いて行く僕たちを、校舎の窓から龍子が見てたなんて全然知らなかった。

「一重ヶ根 多恵子・・・。へえ、成績は優良、運動は良。趣味はピアノ演奏。家庭環境問題なし・・・知にはもったいないわね」

そして彼女がつぶやきながら、僕の調書と一緒に、一重ヶ根さんの調書にも見入っているようとは夢にも思わなかった。もちろん、彼女が「趣味、趣味」とつぶやきながら、カード占いをしたとき、ゲツとした顔をしたことも知らなかった。

栃尾 知くトチオ サトル＞. 2 (前書き)

入れてみたら、けっこう長かったので、分割しました。
3000文字程度が読みやすいでしょうか？

栃尾 知くトチオ サトル> 2

土曜日の朝、約束のゲームセンターに到着。一重ヶ根さん、まだなのかな。そう思って、見回すと、ポニーテールの美人が一人。

「おはよう！」

その美人が声を掛けてくる。あ、一重ヶ根さん。で、でも間違えた。学校では清楚で静かなイメージが、ミニスカートのカッコイイお姉さんに変身している。美人、本当に美女だ。地が良いのに、化粧で変身しちゃってる。力、めいっぱい入れましたって、感じ。

見とれていると、

「変？どっかおかしい？」

気にするところはやっぱり一重ヶ根さん。

「ううん、いつもとイメージ違うから、驚いた。ポニーテールなんて初めて見た」

「まとめてる方が好きなんだけど、いつもは時間がないから、できなくて」

髪に手を当てて微笑んでいる彼女。いいなあ、やっぱりこの娘、好みだ。

ゲームセンターで遊んで、食事もある。次のデートは映画でも行こうと約束した。とっても楽しい時間だった。彼女も楽しんでくれていたらしいなあ。そう思うぐらいの余裕があった。だから、悪魔の足音がすぐそばまで迫ってきてたなんて、夢にも思っていなかった。

彼女がトイレに席を外したときだった。甘い香りが僕を包む。化粧？体臭？なんだかわからないけど、あれ？どっかにこの匂いの記憶が？

ふっと顔を上げると、そこには銀髪の美女が立って、こっちに微笑んでいた。

「こんにちは、探したわよ」

最初はオレのことを呼んでいるなんて、全然気がつかなかった。誰か、他の人に話しかけていると思ってた。でも、周りを見渡しても誰もいない。オレか？って顔をして彼女を見ると、こっくり頷いてくる。

「枳尾 知くんでしょ？ こんにちは」

そう言って、片手を伸ばしてくる。なんで、俺の名前を知ってるんだ？そして、こいつ、誰なんだ？どっかで逢ったか？

「あら、握手するのは挨拶だと思ってるんだけど、返答してくれないの？」

あ、まあ、欧米ではそうか。そう思って彼女の片手を取ると、意外なぐらいの強い力で引っ張られる。そして、俺の手は彼女の両手の中にすっぽりと包まれる。

「あ、お、おい・・・」

「・・・うゝゝん、人間・・・かな？・・・」

なに、小首かしげてつぶやいてんだ？なんだよ、人間ってのは？彼女の手を振り払って、抗議しようとしたとき、後ろで悲鳴にも似た声が聞こえた。

「さ、知くん！？」

や、やばい！！

そこには青ざめた顔をして一重ヶ根さんが立っていた。その目がだんだんと尖ってくる。慌てて手を振り払う。ヤバイ、直感がそうささやく。これは絶対にヤバイ。

「違う、誤解だ！何でもないんだ！！」

「手握られてデレデレして、何でもない！？」

完全に目がつり上がっている。オレは凍り付いた。美人は怒り狂っても美人だ、まだそう思う余裕はあった。でもそれは完全に甘かった。

「バカー！！！！」

彼女はそう叫ぶと思いつき殴りつけてきた。普通、女の子ならパーだろ？そう思ったけど、もう遅かった。彼女のグーはまともにオレの顔面を捕らえていた。

「知、ごめんね、こんなにしちゃって・・・」

一重ヶ根さんはオレの腕の中。顔の傷をそっと撫でてくれる。オレは彼女を抱きしめた。恥じらいながらも、オレの力に従ってくれる。彼女の顔がオレのそばにくる。目と目を合わすと、そっとまぶたを閉じて、唇を差し出す。オレも唇を近づけた瞬間、その黒髪が銀色に変わった。

えっと思うと、彼女は閉じていたまぶたを開ける。その瞳は黒じやなくて、赤。という訳か、一重ヶ根さんは一瞬であの女に変身していた。しかも、さっきまで来ていたはずの服が全部無くなっていた。つまり、オレも彼女も何にも着ていないすっぽんぽんで抱き合っていたのだ。

慌てて突き放そうとしても身体が動かない。彼女はその豊かな胸や腰をオレに押しつけてくる。甘酸っぱい香りが鼻から脳みそに飛び込んでくる。全ての官能を刺激してくるこの感覚はなんだ？まるで人じゃない。しかも最悪なことには、彼女の右手はオレの下半身に蠢いている。

そ、そんなことをされたら、で、で、出る、でちゃうぞ。爆発しちゃうぞ。放出の予感にうめいたとき、オレは目が覚めた。

でも、現実にはふんわりと柔らかく甘い香りが漂っている。

「ごめんなさい。あたしの匂いに反応しちゃった？」

目の前の薄暗がりの中に、あの女性が座っていた。思わず悲鳴を叫びそうになった自分の口を押さえて、咳き込んだ。

「あ、あんた、どうやって・・・!?」

「その窓、鍵がかかってなかったわよ」

「だって、ここ、2階だから、いつも鍵まではかけてないけど・・・って、あんた、よじ登ってきたのかよ!？」

オレの驚きに彼女はふふっと笑う。

「とにかく、さっさと始末しない？。匂うわよ」

うわあ。さっきの夢のせいだ。目覚める直前に爆発してしまっていたのだ。慌ててパンツを着替える。まったくこの女は、トラブルしか持ち込んでこないのか？！

「若いっていいわよねえ。羨ましい・・・」

「あんただって十分若いだろうに。そ、それより、あんた、なんだって、こんな時間に・・・」

「君はあたしのこと、もっと知りたくない？あたしはもっと君のこと、知りたいんだけど」

さっきの夢を思い出してドキッとする。なんて意味深な言葉をかけてくるんだ。

「な、なに冗談言っているんだ！」

「そりゃ、そうよね」

「なんだよ！そりゃ・・・」

「自己紹介もしてないのに、知り合いたいなんてのは無理ないなって思っただけよ。あたしはアルクライム・レ・ファニユ。アルクって呼んでよね」

「おれのこと知ってたよな。で、あんたはいったい何なんだ。昼間は昼間だし・・・」

「あれは悪かったわよ。まさかのされるほど、思いつき殴られるなんて思ってたわ・・・」

「初デートでこんな目に遭うなんて、その方がショックだよ」

「だからあ、貴方が気がついた後で、あたしとのデートに変更しよかって、誘ったじゃない」

「そんなこと出来るわけ、ないだろ。気絶している間に多恵子は帰っちゃうし、まだ携帯番号も聞いてなかったんだぜ。ほんと、もうショックだよ」

薄暗がりの中、アルクは微笑んでいるようだ。あんた、ホントに、悪いと思ってるのかよ。

「で、そのおれに何の重大な用なんだ。こんな時間に人の家にまであがりこんで」

「それを知りたいのなら、明日つきあって欲しいの」

はあ？明日、この女につき合えてか？なんか悪い予感がする。なんか普通じゃないって感じがする。だけど、これを逃したら、もうチャンスはないって気もする。

「も、もうちょっとあんたのことを教えてくれよ。あんたはいったい何者なんだ」

「そうね。言っても信じてくれると思えないから言わないけど、ヒントだけ与えてあげる」

そう言うと、アルクはオレに低い姿勢を取らせた。小さな照明をつけるそれをバックにして立つ。

見上げるような形でアルクは逆光のシルエット。顔は暗くて見えなもの、アルクの銀髪が逆光でまるで光り輝くオーラのようなうだ。

そして、その姿を見たたん、一瞬で記憶が一致した。

「・・・て、天使！」

あの、夢だと思っていた、幻と決めつけていた、誰にも言えなかった天使が、10年前のあの時のまま、目の前にいた。そして、それ以上に決定的なこと、それは、天使を見たことを知っているということは、つまり、あの時にあの場所に・・・

黒い顔のまま、天使がささやく。

「興味がわいたら、明日9時に駅まで来てちょうだい。そこで合流しましょう」

照明が消えると、その姿はまるでかき消すかのように消えた。呆然とするオレの耳に、窓ガラスが閉まるかすかな音が聞こえた。

一重ヶ根 多恵子くヒトエガネ タエコ>. 1 (前書き)

今度と次は多恵子視点の話です。

一重ヶ根 多恵子くヒトエガネ タエコ＞. 1

「悪かったわよ、そりゃ、あたしが悪かったわよ」

こうつぶやくのは、何回目だろう。

「でも、そっちだって、デレツとして・・・なによ、せっかくの初デートだっていうのに、ああ、もう」

抱きしめている枕を殴りつける。

「・・・痛い。右手が痛い。・・・でも、殴られた知はもっと痛かったんだろうなあ・・・」

実際には知は完全にノックアウト状態になっていて、痛いどころではなかったのだが、後も見ないでお店を飛び出してきた多恵子には知るよしもない。

「何にも聞かないで殴っちゃったもんなあ。デレデレしてるあいつが、あいつが・・・ああ、あのほか」

イライラとむかつきと・・・あと、なんだろう、この胸の空気は・・・

「・・・せめて、平手で叩くんだったなあ・・・女の子が拳でなんて・・・もう、終わりかも・・・」

ずーっと、高校に入ったときから、見てた人だったのに。1年の時はクラスが違っていて、遠くから見ただけ。2年になって、クラスが一緒になって、やっと出来たデートだったのに。

「でも、なんか事情があったとか、全然無関係の人だったとしたら・・・あたしの勘違いだったら・・・

あゝ、ならどうして、あんなことしたんだろう。あたしのほか！」

短気、短気、短気。じつは多恵子は怒りっぽい。すぐに元に戻るけど、瞬間湯沸かし器の類なのだ。

自分でもそれがわかってるからこそ、常日頃、おしとやかで静かな女子像を演じていたのに。

「明日謝りに行こう。で、もう一回、デートの約束を取り付けて、今度こそちゃんとデートしてもらおう」

朝、昨日同様、いやそれ以上におめかしして知の家の前まで来た。そんな彼女に気がつかないで、知が家を飛び出していく。

でも、雰囲気が違う。なんか顔が真剣だ。小走りで駅の方に向かっていく。

多恵子も後を追いかけていく。

駅に着くと、そこに待っていたのは、昨日のあの銀髪の外国美女。その美女がほほえんで挨拶している。

「うそよ、そんな、あの二人、知り合いだったの？じゃあ、昨日はあたし、二人に弄ばれたってこと？」

乗り込む二人に見つからないように、多恵子も車中の人になる。

目的地もわからず、切符は適当だ。

「なんで、あたし、こんなことしてるんだろ？追跡してなにをするの？」

そうつぶやいても、多恵子は二人の様子から目が離せない。

馴れ馴れしそうな女性に比べて、知の様子はなんかぎこちない。

迷惑そうな、でも無視もできないような、黙っているようで、ときおり、ぶっきらぼうに返事している。

「なんか変。デートなんて感じじゃなくて、なにか別の目的があるのかも……」

そうカンがささやいていた。

駅を降りてから、二人はタクシーで山間に入っていく。

多恵子も慌てて、追いかける。お金、大丈夫かな？心配するけど、何とか、持ち合わせていた。

着いたのは、えらく田舎の採石場。当然誰もいない。

「こんなところでデートだなんて、死んでもイヤだわ……」

ちよっとした岩場の上で二人は話している。多恵子の位置からは

二人の会話が聞き取れない。

見つからないように、多恵子ではできるだけ近くの場所に身を潜めた。
「・・・10年前、飛行機事故で生還したのは、君で間違いないわよね？」

「ああ、僕だ。そして、その事故の時にアルク、あんたはあの現場にいたのか」

多恵子は声が出そうになって口を押さえた。この女性はその事故の関係者だったんだ。アルクっていうのか。

「・・・ええ。あなたが見た天使というのは、そのシルエットからしてあたしのようなね」

「教えてくれよ。あの事故のことを。オレはほとんど何も覚えていないんだ。あんたはどうしてあの現場にいたんだ？」

「・・・あたしも乗っていたのよ。あの飛行機に」

「う、ウソだ。僕がただ一人の生き残りのはずだ。あんたも乗っていたのなら、どうして生存者として公表されてない!？」

「・・・あたしは公式記録にはいっさい載らないの。あたしは人ではないから・・・」

「どういうことだ・・・? いや、あんたのことは後でいい。あの事故のことを教えてくれ」

アルクは手近な岩に腰掛ける。知もそばに座り込んだ。多恵子も一生懸命に耳をそばだてる。

・・・あの飛行機はアンカレッジからソウルに向けて、予定どおりの飛行だった。日本上空に入った頃は深夜だった。

大半の乗客は眠っていたと思う。ナイトフライトもあともう少しで終わりという頃だった。

何かが後ろで爆発したような音がした。それから飛行機は大きく揺れ、不安定な飛行になった。

キャビンアテンダント達が安心させようと説明して回っていたが、彼女らが立っていられないほど、揺れ続けた。

飛行機は光のない山の中でターンしているようだった。高度もどんどん下がっているように見えた。

きっと機長達は必死で操縦していたのだろう。

しかし、闇の中につつこんでいく様子からは次第に絶望感が高まっていった。

やがて、飛行機は衝撃音とともに山の中に落ちた・・・

「あたしはなんとか脱出することが出来た。ヘリが・・・あ、これは言わない方がいいかな。関係なさそうだし。なんとか周りを探す余裕ができたのは、夜明けの薄明かりが近づいた頃だった。

そして・・・たくさんの死体を見たわ。あなたを見たのもそんな頃だった。」

「助けはこなかったのか？」

「朝になるまでなかったわ。ヘリの音はしてたけど、こっちを見つけれなかったみたいね」

「僕はどんなふうだった？」

「・・・最初見たときは死んでるって思ったの・・・それまで死体しか見てこなかったし・・・

でも、急に咳き込んで血を吐いたの。それで、あ、生きてるってわかったわ」

「そうか・・・。けっこうひどい怪我だったのか。奇跡的に軽傷って聞いてたんだが・・・」

「・・・このままだとすぐ死ぬかって・・・でもそれも、しょうがないかなって思ったわ」

「見捨てる気だったのか！」

「うん・・・でも、君のご両親だと思うけど、そばに倒れていた男が、君に手を精一杯伸ばしているような姿で・・・死んでいたの。それを見たら、・・・なんとかして、子供を助けたいって思いがわかって・・・だから、つい、君を助けてしまったの」

「・・・死にそうだったのか・・・どうやって僕を助けたんだ？あ

んた、医者か？」

「・・・違うわ。助けた方法はまだ言えないわ。あなたがあたしのテストをパスするまではね」

「テスト？」

「そうね、まずは危機的状況を作りたいから、とりあえず、飛び降りてくれる？」

はあっという顔をして知があたりを見回す。多恵子も訳が分からない。切り立った岩場の上なのだ。

まともに飛び降りたら、数十メートルも下だ。

「どこへ行けっというんだ？」

「こんな感じでどう？」

いきなりアルクは知を突き飛ばした。不意をつかれた知は声を上げて転落していった。

さ、殺人・・・！？多恵子の心臓が激しく鼓動する。

あ、あたし、殺人現場に居合わせちゃった。とんでもない所にきちゃった。あの人、見た目と違って、恐ろしい人だったんだ。知が殺されちゃった。どうしょ、どうしよう・・・

自分の目が見た事実には頭が追いつかない。

我に返ったのは、知の声が聞こえてきたからだ。

「・・・い、いてて。おい、アルク、おまえ、いきなり何をするんだ！」

ここからは見えないが、下に岩場が隠れているらしい。そこに転落はしたものの、たいしたケガではなさそうだ。

「・・・反応は人並みってとこね。早くあがってらっしゃいよ。まだテストは続くわよ」

その言葉どおりだった。昇ってきた知にたいしてアルクが攻撃を開始した。いや、武器を持っている訳じゃない。でも、まるで猫のような、鋭い突きや蹴りが知を襲う。何とか対応しているものの知はゼイゼイあえいている。

「や、止めろ！こ、こんなことして、おもしろいのか！」

「・・・全然おもしろくないけどね。でも、このままくたばってもらっても別にかまわないわよ」

もう、見ていられなくなってきた。思わず飛び出すと、知をかばう。

「止めてよ、止めて！いったい何なの？これ！？」

「た、多惠・・・一重ヶ根さんか、僕にも全然わからないよ・・・こいつがサデイストってことぐらいだ」

腰に手を当てたアルクがやれやれという顔をして近寄ってくる。

「もう止めるけど、最後のテストさせて。ちよつと触らせてよ」

アルクの細い指先が知の首を触る。ちよつと頸動脈のあるあたりだ。

「つ、冷たい！お前、なんて冷たい指をしてるんだ？氷でも隠してるのか」

ブルツと体を震わす知。本当に冷たいんだ・・・今、あんなに激しく動いていたのに・・・

「まずは大丈夫って感じね。うん、悪かったわ。たいぶいじめたことは謝るわ」

「何がしたかったんだ？おまえ・・・」

「普段は眠っていても攻撃を受けるとね、血が目覚めることがあるの。それを確認したかったの。まったく反応がなさそうだし、人間になっっているね。よかったわ」

血が目覚める？人間になる？何のこと？

多惠子がそれを聞こうとした時だった。接近してくるヘリの轟音が響いてきた。

一重ヶ根 多恵子<ヒトエガネ タエコ>・1 (後書き)

1カ所、修正を入れました。反省を込めて。

・呼び方は心理的距離や心理状況を反映すること。

例えば、有名どころで才人とルイズでやってみると、

「お前、あんた」・・・心理的距離が遠い

「犬」・・・だいたいぶ近くなってきた

「才人」・・・心理的距離が近い、もしくは「デレ」

再び「犬」・・・心理的になにかあった、もしくは「ツン」

というように、相手の呼び方で読む方は心理を（もしかして、無意識に）認識してしまうので、よく検討しないと、意図しない心理になってしまうので、注意のこと。

実はこれは、前の話の校正中に気がついていて、直していたのですが、今回の校正では忘れていました。読まれた方、混乱してたらごめんなさい。（って、そんな読者いないか（笑泣））

一重ヶ根 多恵子<ヒトエガネ タエコ>. 2 (前書き)

喉が痛くて、ちょっときついです。皆さんも体調管理には十分気をつけてください。よい作品を書くためにも・・・ゴホゴホ。

「あらあ・・・すっかり追跡してきたのね。ここなら見つからないかもって思ってたのに・・・この子がついてきてたのは気がついていたんだけどねえ」

アルクはあきれたという表情でつぶやく。米軍機だ。降りてきた機体の横にマークがついている。

下の広場に着陸する様子を見て、アルクは二人に言った。

「用があるのはあたしだから、ちよつと行ってくるわ。あなたたちはここで待っていて」

二人の目の前で、アルクはひょいと跳んでいく。1回の跳躍で数メートルは軽く飛ぶ。

「な、なんて身体能力なんだ・・・信じられない」

「ハイヒールよ。あの人・・・どうしてあんなこと、できるのかしら？」

周りで物音がした。

「我々も彼女の秘密を知りたいと願っていますよ」

別の声が割り込んできた。二人が振り向くと、数人の男達が取り囲んでいる。

「な、何ですか？あなたたちは」

知の腕にしがみつく。

「警察です。あなた達を保護します」

「警察？警察が、僕たちに何の用があるんですか？」

「すまない。彼女、及び彼女に接触した者を保護せよとの命令なんですね」

「彼女はいったい何者ですか？なぜそんな命令が出ているのですか？」

「申し訳ない。それも全くわからない。できたら、彼女自身に聞い

てみてくれないか」

指揮者と思われる人物が指さす方向、ヘリのそばにアルクは立っていた。ローターの巻き起こす風に、彼女の銀色の髪の毛が揺れ動く。

「フローレンス、あんたでしょ。そろそろ追いかけて回すのはあきらめたらどう！」

アルクの声に呼応するかのように、ヘリから降りてきたのは迷彩服の女性。

「アルク、あんたを捕まえるか殺すまでは絶対に止めないわよ。何年たってもどこへ行っても追いかけて回してやる！」

アルクは両手を広げて、やれやれのポーズ。

「あんたのその、いけ好かないポーズをとことん壊してあげるから。撃ちなさい！」

彼女の叫び声に重なるように、激しい射撃音が聞こえた。思わず目を閉じ、手で耳をふさぐ。こんな激しい音は生まれて初めて。

「あ、アルクさん、撃たれちゃったの・・・？」

「い、いや・・・無傷だ。けど、そんな、信じられない」

知が呆然としている。自分が見たことが信じられないようだ。やっと目を開いて、アルクを見た。なんだか、ボアツとした物に彼女は包まれているみたい。腕組みしている彼女の周りで銀色にきらきら煌めく靄。・・・え、あれ、髪の毛？

アルクの長い銀色の髪の毛が、まるでそれだけが別の生き物みたいに彼女を包み込み、動き回っている。

「あ、あの髪の毛で、銃弾を、全部防いだんだ」

「そんな・・・髪の毛って、そんなこと、できるの？」

そんなことがあるはずがない。でも、目の前にある現実は何に？ 射撃手もそれに気がついたのだろうか、いつの間にか、射撃音も中断している。アルクはすたすた歩き始めた。あの、フローレンスとかいう女にどんどん近づいていく。

「撃って、次撃って！」

今度のはもう少し大型の火器だった。爆発力は大きい、けど、アルクはそれをたやすくかわしていく。まるで、ちょっとした風か、雨の中でも歩いているかのような。平然と、早足で、銃撃の中を進んでいく。銃器の威力を知っている人たちほど、この眺めはショックのようだ。周りの警察はそれこそ、呆然とこの眺めを見ている。とうとう、フローレンスの目の前に着くと、彼女の胸ぐらをつかむ。

「や、止めろ！」

「あんたこそ、止めなさいって」

両足が地面から離れるほど、持ち上げている。

「く、くう！」

フローレンスが銃を取り出す。アルクの頭めがけて、引き金を引く。小さく、パンという音がする。

「ふん！撃たせてあげたのよ。満足した！？」

アルクはフローレンスを投げ出す。どうっと倒れ込むフローレンス。

「あんた達は困るとすぐに武器よ、力よ。もういい加減学習しなさい」

アルクににらまれて、後ずさを始めるフローレンス。でも、口だけは達者だ。

「こ、今回は負けでも、次は絶対に勝ってやるからね、絶対に捕まえてやる！」

「やれるもんならやってみなさい。そう言いながら今まで1回も出来なかったこと、忘れてるの？」

彼女らが乗り込むとすぐにヘリは飛び去っていった。何事もなかったかのように、アルクは小走りでこっちにやってくる。いや、岩場を飛んでくるといった方がピッタリの表現。

彼女が現れると、取り囲んでいた警察もジリジリ下がり始める。彼らが手に持っていた武器を見て、アルクが言う。

「今の、見てたでしょう？そんな拳銃、何の役にも立たないわよ」

アルクがそばに来た。その額には小さな血の跡がある。やっぱり撃たれているのに・・・どうして、平気なの？

警察の指揮官が前に出る。

「アルクライム・レ・ファニユさん、警視庁の胡桃島といいます。我々と同行願えば、逮捕しなくてすむのですが」

「逮捕も同行もないわよ。力尽くならどういいう結果になるかはもうわかったでしょう」

胡桃島も頷くしかない。小火器が通用しない相手なんだから。

「この子達に迷惑かかるとは思いませんか？」

「思わないわよ。警察が人質を取ったდანანて、おおっぴらに出来ないし、そもそもあたしとこの子らは無関係なんだから」

さっき、あなた、あたし達を”保護”って言ったじゃない？それが逮捕？人質？

頭に血が上った瞬間だった。遠くで何か、音がした。

警察の人はそれなりに武器とか護身とかに慣れているのだと思う。音がした瞬間にさっと身構えていた。でも、あたし達は違う。

アルクさんは銀色の靄を身にまとっていた。でも、知とあたしにはそんなものはない。

音がした直後、なにか強い衝撃が体に走った。熱い火の棒が左のおなかの中を突き抜けた。

「な、なに？何？これ」

強く痛む、そこを押さえる。何か温かいもので両手がべったりとぬれる感触。手を見ると、真っ赤になっていた。痛みがどんどん強くなる。何か、言おうとするけど、のどを誰かに締め付けられているようで、声も出ない。

知？さとり？助けて、ここから助けて？あるく・・・さ、ん？

視界がぼやけてくる。暗闇が襲いかかってくる。膝をついたのも、倒れてしまったことも、もう、わからなかった。

アルクライム・レ・ファニユ・1 (前書き)

やっとアルクの話しまでたどり着きました。ここの告白が今回の話しの元です。これを書きたかったばかりにここまで・・・ということ。

アルクライム・レ・ファニユ・1

その音が聞こえたとき、銃声と分析していた。本能的に髪の毛の表面を硬質化し、周りに張り巡らす。これで大丈夫なはずだった。あたし一人なら・・・

でも、直後に多恵子がうめき声を上げて倒れる。彼女の服に赤いシミがみるみる広がっている。咳き込むと口からも血が出る。肺も傷ついているようだ。

「多恵子、しっかりしろよ！多恵子！」

知の声が悲鳴になっている。あの胡桃島とか言う男が多恵子の様子を见ている。でも、救急車の手配をしようが、ドクターヘリを飛ばそうが、あたしの見る限り、間に合いそうにない。

「あんた、俺たちの保護はどうなったんだ！！」

知の血相が変わっている。怒ったってしょうがないじゃない。誰が撃ったか知らないけど、少なくとも彼が悪い訳じゃない。

胡桃島以外の警察は安全確認のために飛び出していった。彼はどこかと連絡を取っている。間に合わないって。それが感じられるのか、もう知は泣き声になっている。

「多恵子・・・・・・・・アルク、何とかならないか」

あたし・・・・・・・・そう、あたしなんだろうな。

「理解できないけどお前、普通じゃない。何か、とんでもない力を持ってるみたいだ。昔、オレを助けてくれたんだよな。その力で、今、多恵子を助けることはできないのか？」

知はじつとあたしを見つめてる。彼の腕の中で、もう多恵子は意識がなくなってる。薄目を開けて、でも、何も見ていない。何も見えていない。

「アルク！！」

そう、それが問題。力があると言うこと、そしてそれが災いの種になると言うこと。でも、放っておくこともできない。鬼にな

れない。吸血鬼のくせに鬼でいられない。情に勝つことが出来ない。後でどうなるのか知っているくせに。

あたしは知から多恵子を受け取る。力のない、物だけの重み。わずかな呼吸。暖かな血のにおいがあたしを襲う。・・・おいしそう。急激に広がる欲望を必死で抑えつける。欲望に身を任せている場合じゃない！理性を保ちながら、衝動を全開させる。

「あ・・・アルク！」

知が身を引いたのがわかる。胡桃島も驚いている。そう、あたしは変身してしまう。知っている。今のあたしは、金色の目を輝かせて、口からは2本の鋭い牙が飛び出しているのだから。

「いいこと、これからのあたしの様子を見たら、人でいられなくなるかも知れなくてよ。覚悟しておきなさい」

あたしはそう言い放つと、多恵子の細い首に口を当てた。そして、牙を彼女に突き立てる。何の抵抗もなく、頸動脈にまで達する。

「ひい！・・・き、吸血・・・鬼！！！」

胡桃島が逃げ出した。知もあまりの衝撃的な様子にただ見守るだけ。いや、腰が抜けて動けないのかも知れない。しばらくするとあたしは口を外す。その跡には2つの傷跡が残ってる。わずかにあふれ出す血。

あたしは衝動を抑止する。いつまでもあの状態を保てない。もたない。

「・・・間に合うかしら。もうほとんど時間がなかったから・・・」
多恵子をそっと抱きしめる。ギリギリ、いやもしかすると間に合わなかったかも。

「お前、ほんとに、ホントに吸血鬼なのか？」

「・・・そうよ。でも今は血を吸ったんじゃないくて、あたしの血を分け与えたただけだね」

「そうすると、どうなるんだ？多恵子は、助かるのか？」

「・・・間に合えばね。吸血鬼の血は細胞組織を最大限に活性化させるから、命を取り留めるかも・・・」

多恵子の服をめくった。腹部に受けた銃創、血まみれになった傷跡がどんどん小さくなっていく。

「信じられない・・・けど、ほんとに傷が治っていく・・・」

「・・・でも、いくら吸血鬼の血でも、死者を生き返らすのは無理よ。命の最後の灯火が消えないうちに直ればいいんだけど・・・」

「これからどうするんだ。医者に担ぎ込むのか？」

「すぐに移動しなきゃならないわ。ここに長居できない。あいつが襲撃してくる」

「あいつ・・・あの女か。いや、僕たちには戦う力はないし、アルクの言うとおりで。さっさと移動しよう」

あたしが多恵子を背負っていく。知は前を用心しながら歩いて行く。

「警察の連中は、どうしたかな？」

「自分の身は自分で守ってもらわよ。今のあたし達には自分のことで精一杯ね」

しばらくすると、ヘリの音が響いてきた。知にも身を隠してもらう。変なところで見つかったはどうしようもない。ヘリが行きすぎると、後方で轟音がした。まばゆい光と火柱が立つ。

「な、なんだ、あれ？」

「ナパームよ。あたし達を焼き払ってしまおうって魂胆。もっともこんなんでやつつけられるとは思ってないでしょうけど」

あたし達は歩き続けた。次第に多恵子の重みが肩にのしかかってくる。普通ならこのぐらい、何ともないのに。多恵子に分け与えた血の分、あたしの精力がはぎ取られている。

多恵子の様子を見るという名目で、ちょっと休んでもらった。多恵子は浅いながらもしっかり呼吸している。

「大丈夫みたいだよ」

「これから、大変なのはこれからなのよ」

あたしの疲れた様子と、多恵子のことが心配で、知が周りを探り

に行ってくれた。そのおかげで近くのおじいさんの軽トラックを引っ張ってきてくれた。病院に連れて行くというおじいさんを何とか止めて、家で休ませてもらうことになった。多恵子の血だらけの服にひどく驚いていたけど、多恵子を布団の中に入れることができた。よく眠っている。多恵子の呼吸は正常のよう。早いけど、脈拍も落ち着いているみたい。

あたし達が落ち着くと、おじいさんは席を外した。

「聞かなくていいことは聞かないに限る。できるだけ巻き込まないでくれ」

あたしは黙って頭を下げる。このおじいさん、年の功だけあってちゃんと処世術を心得てる。

「なあ、アルク。あんたのこと、もつと教えてくれよ。吸血鬼・・・まだ信じられないよ。実在するなんて・・・」

あんまり、自分のことなんて、話したことない。でも、空に浮かんでいる細い月を見ながら、あたしは話し始める。

昔々、ある国に、それはそれは、立派な王様と素敵な王妃様がいました。

王様は人々から「日王」と呼ばれ、王妃様は「月姫」と呼ばれ、敬愛を受けておりました。

特に王妃様は誰にもお優しく、慈愛に溢れていて、国民はそんな王妃様が大好きだったのです。

その地にも魔物はいましたが、強力な軍隊により辺境の地に追いやられ、王国は栄華を極めました。

この繁栄はいつまでも続くものだと、王様も王妃様も市民みんなが思っていたのです。

ある日、不幸な事故が起きました。

部下を助けようとした王妃様が傷つき、危篤状態となったのです。国民は驚き、そして訴えました。なんとしても助けてくださいと。王様も同じ思いでした。しかし、お医者達は首を横に振りました。もう、治療法がありません、と。

でも、そこに軍隊から届いた物があつたのです。魔物の血でした。それは一か八かの賭でした。治療効果があることは実験で分かっていた。

でも、副作用もあつたのです。人が人でなくなるといふ、恐ろしい副作用が。

お医者達はためらいました。

しかし、最後は国民の声に押されるように、王妃様の傷口にその血を塗ったのです。

そして、見事に王妃様は回復したのです。

その直後から恐ろしい事件が起きるようになりました。血を吸われ、亡くなる人が続出したのです。

やがて、この犯人は王妃様ではないか、という噂が立つようになったのです。

アルクライム・レ・ファニユ・2（前書き）

アルクの告白の続きです。1，2と別れた関係でちよつと読みづらいかもしれませんが、前から連続で読んでください。

彼女が墜ちていったということ、その訳、それからどうなったかなど、告白させたつもりです。彼女の心境が伝わってきますでしょうか。それだけの筆力があればいいな。

アルクライム・レ・ファニユ・2

（アルクの回想の続きです）

夜、真っ白な美人が優しい声を掛けてくる。その声に釣られると、物陰で血を吸われる。

金色に輝く瞳や甘く誘惑する声に誘われてはならない。行けば命がなくなる、と。

市民達は自警団を作りました。自分たちで自分たちを見張るようになったのです。

事件は少なくなりました。でも、その代わりに王宮の中で事件は起きるようになりました。

そして、とうとう、血を吸っている現場を押さえられてしまったのです。

犯人は、噂どおりの、王妃様でした。あの魔物の血が王妃様を狂わせてしまったのです。

王妃様は捕らえられ、牢屋に入れられました。王妃様は泣いて訴えました。殺してくださいと。

しかし、事故前のやさしい王妃様を知っていたみんなは、王妃様を殺すことに躊躇しました。

以前の王妃様に戻るかも知れない。今は一時の気の迷いであって、元通りになるに違いないと。

でも、それは甘い予想でした。実際には王妃様は牢屋を抜け出していたのです。

あの金色に光る瞳で、牢屋番を誘惑し、仲間を引きずり込んでいたのです。

そして王妃様の仲間達が市民を襲い、王妃様に血を与えていたのです。

王妃様は時折、正気に戻られました。

そして、自分がなんと罪深いことをしているのか理解していたのです。嘆きました。

悲しみました。しかし、飢えがやってくると、血が欲しくてたまらなくなる、

もう、そんな気持ちはどこかへ行つて、

誰かの血を飲み干すまでは我に返ることは出来なかったのです。

さすがにもう、市民達も我慢できなくなってきました。

王妃様を殺そう、そんな声が溢れるようになりました。

王様もとうとうあきらめました。王妃様を処刑台に連れ出しました。でも、それこそが最後の始まりでした。

その場所で、王妃様の牙が、王様ののど元に食らいついたのです。皆の目の前で、王様は絶命しました。

いつの間にかたくさん増えていた王妃様の仲間が一斉に市民達に襲いかかりました。

王妃様自らも何人もの市民達の血を飲み干したのです。

そこへ辺境にいた軍隊が駆けつけてきました。

これで助かる、そう思った市民は我が目を疑いました。

軍隊を追いかけけるように、追いやられていた魔物達が襲いかかってきたのです。

魔物、吸血鬼、追いかける軍隊、逃げる市民。王国は阿鼻叫喚の世界となりました。

神様があまりにも不憫に思われたのでしょうか。お慈悲だったのでしょうか。

王国を大噴火と大地震と大津波が襲いました。そして海原の下に沈み、すべては消えたはずでした。

でも、王妃様は生き残ってしまったのです。

王妃様を最後まで慕い、尊敬していた者達が、正気に返っていた王妃様を船に押し込み、必死で王国の外へ連れ出したのです。

王妃様が血が欲しいと言えば、我が血を与えながら、安全な大地を見つけるまで航海を続けました。

そして新たな大地を見つけると、そこで王妃様の新しい王国を作ったのです。

王妃様はいつまでも若々しく、年を取りませんでした。

まさしく特別な血を持った者として、王に相応しい者であったのです。

しかし、その王国では人身御供が行われ、生贄の血や心臓が王妃様に捧げられました。

残虐な行為を行っている自分に嫌気がさして、王妃様は何度も自殺を考えました。

もはや自分は人ではない。人でない者が人の間で生きていける訳がない。

でも実行に移すだけの勇氣は残念ながらありませんでした。

自分は何のために生きているのだろう。自分はどこまで墜ちていけば許されるのだろう。

そう思いながらも生贄の喉に牙を立てるしかなかったのです。

文明は起きて、滅んでいきました。人身御供の文明は所詮長続きはしなかったのです。

王妃様はその度に場所を変え、名前を変え、潜んでいきました。

ある時は山城に潜み、時には市民社会に潜り込みました。

やがて近代国家になると、どこからか軍隊の方から彼女に接触してきたのです。

その血を研究させて欲しい、医療に役立てたい、と。

王妃様は、あ、もう、国はないので王妃ではなくなってますけど、話が混乱するので王妃様で統一しますね、王妃様はその言葉にころりとだまされました。

自分が生きながらえてきた価値はここにあったのだと、喜んだのです。

何人も殺してきた自分の血が、今度は人を助けるために役に経つのなら、と思ったのです。

もともと王妃様は優しく、慈愛に溢れた方でしたから、そんな言葉に共感されたでしょう。

でも、王妃様が提供された血は、医療よりも、軍隊のために研究されたのです。

その血を使えば、負傷しない兵隊、負傷してもすぐに直る兵士ができると思われたのです。

そんな軍隊なら世界を征服することができると。

でもそれは当時のナチスには理想でも、他の国から見れば悪夢でした。

やがて王妃様も残虐な人体実験を繰り返すやり方に、現実気がつかしました。

そして王妃様自らの手で実験施設を破壊し、すべての資料を焼却破壊しました。

・・・全て処分したと思っていたのです。

それから国は違っても軍や情報機関は彼女を追い続けました。

彼女を掴まえて研究資料にするか、他の国が掴まえる前に彼女の存在そのものを消し去るか。

軍や研究機関に自分から乗り込み、破壊活動を行うこともありました。

自分の血の秘密が他人を殺すことに使われるかも知れないと思って

いたのです。

王妃様は逃げ続けました。逃げ続ける一方で、魔物や吸血鬼の噂を聞けば、

その地に赴き、噂が本当であれば魔物達を抹殺しました。

自分の過去の清算は、そうすることでしか果たせないと思っていたのです。

不幸な事件もありました。噂を聞いて、行こうとしてから別件が関わって、

行くのが1日遅れたことがあったのです。

そして、その1日で、その村は壊滅しました。

駆けつけたとき、人間は殺され、魔物と化した者達だけが跋扈する村となっていたのです。

王妃様は、全てを消し去りながら、悲しみ、自分を呪い、自分を責め続けたのです。

全ては自分が悪いのだと。

吸血鬼や魔物を全て消すことが、自分がまだ生きている意味だと考えるしかなかったのです。

.....

「アルクさん、とても苦勞してたんですね」

いつの間にか目を覚ましていた多恵子がつぶやいた。

「多恵子」

「よかった・・・気がついたのね。どう？具合は」

「なんとなく、だるくて、熱っぽいけど、とりあえず大丈夫って感じです。・・・あたし、これからどうなるんですか？」

そうよね。それをはっきり言ってあげないと、不安ばかり増幅しちゃうよね。

「・・・時間がなかったの。もう多恵子は死ぬ直前にまでいった。だから、カンであたしの血を送り込んだの。」

時間さえあれば、体質や体調を考えて量を調整しながらゆっくり送り込んだ方が多分よかったの。

あなたの持っている資質によっては、あたしみたいな吸血鬼になるかも知れない。

もし合わなければゾンビのような人間の意識をなくした不死の怪物になるかも知れない。

うまくいけば知みたいに、吸血鬼の血が発現しないことだってあるわ。

でも送り込んだ量が多いから、それはどうかなって思ってるけど」

「それは・・・いつ、わかるんですか？」

「わからない。発現するときは経験から1年以内ってことが多いけど・・・本人の心、精神状態とも関係あるみたいだし。はっきりしたことが言えないの。」

だから、多恵子も、いつかってのはわからないとしか、言えないの」

知が口を挟む。

「聞きたいんですけど、吸血鬼なんですよ、アルクさんは・・・」

「ええ」

「でも、見た目は全く人と変わらない。もし、多恵子が吸血鬼になったとして、どこが変わるんですか？」

人と変わらない。超人能力と金色の瞳、牙、それぐらい。人に交じって生活しても、なかなか老けないという点が目立つぐらい。でも、心の中が変わってしまう。

「吸血鬼になると、血が欲しくなってしまう。当たり前よね。吸血鬼だもん。」

吸血衝動って言うてるけど、これが抑えられないと、手当たり次第に生贄を求めることになるわ。

この衝動に一度でも負けると、吸った血のおいしさを味わうと、もう抑えが効かないの」

「そんな・・・あたしもそうなるんですか？血を求めて・・・さまようんですか？」

「家や学校で、襲いかかるかも知れないわね。今までそんなのは、いっぱいあった例なの。」

さっきまでいい人だったのに、人が変わったように急に襲いかかってくる。

かみ殺す。生き血を吸う。本人も吸血衝動があるなんて、思っていなかったのかもしれないけど。

抑えられなくなってしまったのね」

多恵子を虐めているつもりはない。ただ今までの経験から事実を話しているだけのつもり。

でも、多恵子は泣き始めてしまった。自分を襲うかも知れない未来に対する恐怖。

「今まで、その、吸血衝動を抑えた人はいないんですか!？」

慌てて知が話す。いつの間にか、多恵子の手を握っている。そうよ、支えてあげないと。

「知らない。そう言う人は殺しに行く必要がないから、網に引っかかってこないの。」

あたしが消しに行くのは、吸血鬼や魔物に変身してしまった人だから」

あたしは時計を見る。潮時だと思う。

「多恵子、動ける？ 長居は無用だと思うから、そろそろお暇しない？」

多恵子の同意を得て、あたし達は立ち上がった。おじいさんにお礼を言いに行く。

何にも言わない、何も聞かない。でも、おじいさんは駅まで送ってってくれた。それどころか、食べる、だけ言って、おにぎりまでくれた。不細工だったけど、なんだかホッとする。

二人に食べてもらった。

知はガツガツ食べたけど、多恵子はうっすらと涙を浮かべながら、よく味わうように食べていた。

枳尾 知 3 (前書き)

一番書きたかった告白を書いてしまったので、
後は坂を転がり落ちるようにダラダラと・・・
まとまるのかなあ？

栃尾 知 3

次の日のお昼、ぼくと多恵子はお弁当を食べていた。このお弁当は多恵子が二人分、作ってきてくれたのだ。朝、学校に来るなり、多恵子が話しかけてくる。

「昨日のデート、楽しかったね。今日、お昼、二人分作ってきたから、一緒に食べよう」

僕もクラスメートも驚いていた。

話の内容もそうだけど、にこにこ笑っている多恵子の表情が先週までと全く違うのだから。

こんなに笑顔のかわいい娘だったっけ？男子は当然、女子でさえ、そうささやきあっていた。

彼氏できるとちがうわねえ、結局、それで納得していたみたいだけど。

「昨日はごめんね。あんなに怒ったお父さん、初めて見たわ」

「しょうがないよ。心配かけたんだから、怒られて当然だよ」

「知クンが悪いわけじゃないのにね。ごめんね」

昨日、多恵子の家まで送っていった。

当然、本当のことは言えないので、二人でデートしてましたってことにした。

本当のことを言ってももちろん信じてもらえるはずはないのだから。玄関口でお父さんにひどく罵倒された。でも、何言われても、ガマンする覚悟は出来た。

多恵子の方が辛い覚悟を迫られているのだから。

一生懸命謝って、多恵子のフォローもあって、最後には許してもらえたようだ。

おかあさんからは「これからも多恵子のこと、宜しくお願いします」

ね」とまで言われてしまった。

もちろん、「ハイッ！」って精一杯元気に答えた。

まるで多恵子が吸血鬼になったことを言われているような気がしてドキッとしたけれど。

玄関を出ると、多恵子が送りに出てきた。少しだけ二人で歩く。

「ね、あたし、本当に吸血鬼になっちゃうのかな？」

「わかんないよ、そんなこと。でも人間のままってこともあるって、アルクが言ってたよね」

「・・・もしあたしが人間じゃなくなったら、殺してくれる？」

周りの友達や家族を殺しちゃうなんて想像も出来ないけど、そんなことするのは絶対にイヤだから。

だから、もし正気じゃなくなったら必ず殺してくれるって約束して」

「そ、そんなこと、できないよ」

「ダメだよ。約束してくれないと、あたし、今すぐにでも死んだ方がいいって気持ちになっちゃうよ」

「・・・わかったよ。約束する。多恵子の人じゃなくなったら、消してあげる」

「・・・ありがとう」

多恵子の訴えるような瞳に惹かれて、顔を近づける。瞳を閉じる多恵子。

彼女の唇に、そっと重ねた。すぐに離れてしまったけど、暖かく、柔らかな感触が残る。

多恵子は真っ赤になって、でもほえんでくれた。

でも、彼女が唇を離れたとき、その唇を少し舌の先でなめたとき、瞳に金色の輝きが走ったような気がした。あの、アルクの瞳と同じように。

その光は見間違いだったのかもしれない。

横を走っていった車のライトの反射だったのかもしれない。

そう思いこむ僕の体の中を秘やかな戦慄が走り抜けていったのは事実だ。

そんなことを考えているなんて、多恵子は夢にも思っていないのだろう。

お弁当を片付けると、デザート果汁ジュースまで飲んでいる。にこにこしている彼女を見ると、吸血鬼だなんて悪い冗談にさえなりそうにない。

「・・・なに、そんなに見つめてるの？」

「あ・・・いや、ごめん。その、なんて言うのか、昨日の今日だから、

もっと落ち込んでいるのかなっと思ってたから、ギャップにちよっと・・・」

「うん・・・でもね、昨日の夜に考えたの。将来が不安なのは、別にあたしだけじゃないって。」

知くん自身、明日の保証って何かある？」

「え・・・あ、いや、何となく。今日と同じように明日があるって、思っているくらいで・・・」

「でしょ？たとえば明日、交通事故で死んじゃうかもしれないと思っただら、

あたしとそんなに立場、違わないんじゃない？」

僕は多恵子の顔を見つめた。吸血鬼になるって・・・交通事故と大差ない？

「それと知くんにとってよ、明日死んじゃうかもって今日メソメソ泣いてる女の子と、

明日死んじゃうかもしれないから、今日は精一杯生きる！って笑ってる女の子とどっちがいい？」

「そ、そりゃ・・・あゝ、笑ってるほうかな？考えたことないけど・・・」

「だから、笑っていたいの。もし吸血鬼になるとしても、それまで

に楽しいこといっぱいして、

目一杯生きて、最後、知くんに消してもらえばいいんだから。なんかそう思うと勉強も楽しいの。食事も、ううん、呼吸ですら、楽しいの。

ああ、あたし、この瞬間、まだ人として生きているんだなあって、こんな感じ……。

だから、またデートしよ！おいしいもの、食べよ！」

明るい多恵子にかえって後悔の念が強まる。

「……どうして、どうして、お前が吸血鬼なんかに、ならなきゃいけないんだ……」

「だめ、アルクさんは悪くないよ。ああしなきゃ、あたし、あの時に死んでいたんだから……」

笑顔の多恵子の目に少し涙が浮かんでいるようだった。

「きつと、あたしの運命だったんだよ。これ……だから誰も恨まないで。」

あたし、恨んでないから……だから楽しいことだけさせて……

他人を恨んでいると、すごく辛くなるから……だから、誰も恨みたくないの……」

わかった、わかったよ。後ろばかり向いてると、前がわからなくなるものな。

うん、楽しいことしよう。デートもいっぱいしよう。

無理矢理笑う僕がいた。

でも、あの日感じた戦慄はやっぱり本当のようだった。

多恵子は体調は全然変化ないけど変な夢を見ると言い始めた。

最初は自分の後ろに黒い人影がいて、それを不気味に思う自分がいえると言っていた。

そのうち、その黒い人影は自分自身だと気がついた。

自分を襲う自分がいる、そんな不安なイメージがあるって。

現実の多恵子にも変化があるようだった。気がついたのは毎日持ってきているお弁当。

ぼくのお弁当には変化ないのに、彼女の分は量が減ってきていた。メニューだって、野菜や果物が中心になってきていた。果汁ジュースはたっぷりとしていたけど。

「あまりお腹減らないの、ダイエットにちょうど良いと思って」

そう言う多恵子の肌は白くなってきているようだった。

明るくなった多恵子はクラスメートの中でも人気者になってきていたけど、

その中でも多恵子の瞳が金色に輝くときがあることが噂になっていた。

誰にも確証がなくて、単なる噂レベルだったけど、みんなが見たとなると、不安になってくる。

そしてとうとう体育の時間中に多恵子が倒れた。貧血だそうだ。

「どう？大丈夫？」

「うん、めまいがして・・・もう大丈夫だと思うけど・・・気持ち悪い」

「知くん、彼女、送って行ってあげなよ」

龍子先生、なかなかいいアイデアですね。

「君たちが出来ていることはもう、クラス公認みたいなもんになっているからねえ」

・・・出来ている、まあ、言葉は引かかるけど、事実は事実か。それに二人つきりになれるいいチャンスには違いない。

多恵子を送る帰り道、公園で休んだ。

彼女の目の前で自分の指に小さな傷をつける。小さな血豆ができる。アルクに教わった、吸血鬼かどうか判断する一番いい方法。それは血を被験者の前に差し出すこと。

吸血衝動があれば、必ず何らかの反応があると言っていた。

血豆を見た多恵子の身体が小さく震える。喘ぐ多恵子。

そして、その指を手につくと、自分の口の中にそっと入れる。

そして、舌で指先の傷をなめる。まるで小さな子供がお菓子を味わうかのような舌使い。

自分のしていることに気がついて、真っ赤になって指を離す多恵子。

「ご、ごめんなさい！傷を・・・」

そう言うのと、あわてて取り出したバンドエイドで傷をふさいでくれる。

でも、ぼくは言葉も出ないぐらいにショックを受けていた。

我を忘れて血をなめる多恵子に、そして彼女の目が妖しく金色に輝くことを見てしまったのだから。

枅尾 知 4 (前書き)

アクションシーンをまともに描写できるだけの筆力がないので、ごまかし誤魔化しで書いてます。苦手と言っているはいけないのですが、やっぱり難しいものは難しいですね。

下書き段階ではほぼ校了してて、次のアイデアも出始めていますので、さっさと終わらせちゃいましょうか(笑)

知クン、ご苦労様でした。あ、最終話も君が語り手か。ゴメン

析尾 知 4

その夜、ぼくはベッドの上に携帯を投げ出した。

もし、多恵子に吸血衝動があることが分かったのなら、すぐに連絡をよこすようにとアルクは言っていた。連絡をすればどうなるか、聞かなくても分かる。

「あいつは吸血鬼を殺すことで生きている。そんな奴に多恵子が吸血鬼でしたと言ったら、当然殺しにくるよな」

だから連絡できない。

多恵子を守ってやりたい。

あいつは何も悪いことはしてない。

あの日、オレの後をついてきただけのことなのだ。

たったそれだけのことで、死にそうにはなるわ、吸血鬼にされるわでは、割に合わないことばっかりじゃないか。

せめて、オレが守ってやれる間は守ってやらないと・・・でも、どうやって守ってやればいいんだ。

オレにそんな力があるんだろうか？

そこまで考えると、オレはベッドの下からある物を取り出す。

アルクがこっそりと渡してくれた、短剣。魔物封じの剣だと言っていた。

さやから取り出すと、輝いている。

「この光に魔物は弱い。光を見るだけで逃げ出すぐらい。剣としちゃあ、ナマクラよ。紙だって切れやしない。魔物以外に使ったらたぶん壊れるわね。だから絶対魔物以外には使わないでね。これ、最後の1本なんだから」

昔、王妃だったというあの頃の剣なんだろうか。

護身用として、肌身離さず持っていたらしい。

この剣は、オレの力になってくれるんだろうか・・・この剣で、多恵子を消してあげることができるんだろうか。

実力では、たぶん、吸血鬼化した多恵子には、かなわないだろうからなあ。

多恵子に変化が現れてきた以上は、この剣をそばに持ち歩くことにしよう。

まあ、まずはもうしばらく様子を見守ろう。まだ時間があるかもしれない。

これからでも吸血衝動が治まるかも知れない。

眠りに落ちかけたまぶたの裏で、アルクが「ふん、甘いわね」という顔をしていた。

そして実際に甘かった。

多恵子の母親から携帯に電話があった。

突然で驚いたけど、多恵子に番号を聞いておいたのだという。学校の様子を聞かれるが、普段と変わりが無いと言っておく。

「そうですか・・・最近、食事をよく残すようになったので、心配なんです。あの、馬鹿な女だと思われて当然だし、失礼も甚だしいのですが、どうしても聞いておかないといけないと思って・・・」

そう聞いてドキツとする。

まさか女のカンというやつで、吸血鬼に気がついてるのだろうか？

「食事の好みが変わるといえるのは・・・まさか、あの子、にんしんとかしてないでしょうか」

にんしん・・・ニンシン・・・妊娠・・・はあ！？妊娠？

言葉を聞いただけじゃあ理解できなくて、頭の中で漢字に変換してもまだぴんとこなくて、意味を理解して、この母親が何を心配しているのか、やっとわかった。

必要もないのに、慌てふためいて説明する。そんなことはないです。絶対にないです。

あの、軽いキスはしましたけど、それ以上は全然してないです！電話のこっち側でむちゃくちゃ汗をかいている。

もちろん母親も本気でそう言っているわけではなかった。

娘のことを心配するあまりに、いろいろな可能性を考えているだけなのだ。

再度、絶対にそんなことはしてないこと、そしてこれからもよく注意して見守っていることを約束した。

母親は何度も何度もお礼を言っただけで電話を切った。

そして次の日のお昼、電話のことを多恵子に伝えた。

妊娠のことではあきれて、ケラケラ笑っていた多恵子が最後はポロポロと涙を流していた。

「ごめんなさい、お母さん……でも、本当のことなんか、もつと言えない。あたし、嘘つきの悪い子になっちゃった……」

まだ妊娠の方が、母親には理解しやすいと思う。娘が吸血鬼になっただけでした……理解するとはさすがに思えない。

だがその本人は、今日も貧血で体育を休んでいた。

青白い肌がまるで透き通るように見える。

血管が浮き出て見えるみたい。その血管さえなんだか青白い。

お弁当どころか、家の食事さえ、果物やジュースがメインになっているようだった。

お肉やご飯はひどくまずく感じると言っていた。

「昨日、夕食の用意してて、生肉を触ってたらね、急に生なら食べられるかなー？って思って、少し口に入れたの。そしたら、ひどい味で思わずゲロツてきちゃった。横でおかあさん、呆れてた。あー、あたしって馬鹿ね。これじゃあますますおかあさんに心配かけちゃう」

冗談ぽく笑って言うけど、これも吸血衝動の一部なのだろうか。

僕は思いきって多恵子の前で指を切った。この前より深く、長く。傷から血が溢れてくる。

それを多恵子の目の前に突き出す。

「……知くん」

「これ、嘗めろ。そして約束してくれ。オレ以外の血は飲まないって。オレはお前にできることは今はこれしか思いつかない。オレだけですむんなら、他人に迷惑かけないようにすればいいのなら、それでいい。さ、飲んでくれ」

これがなんとか多恵子を助けようとして、精一杯考えた末の結論だった。

多恵子の目が光る。その輝きは、見るたびごとに強く、妖しく光るようになっていくみたいだ。

多恵子の手がオレの指を掴み、自分の口に入れる。青白かった頬に赤みが差す。

飲むというにしては量が少ないのだけれど、多恵子には満足のようだった。

だが、多恵子がホッとした表情を浮かべたとき、僕はもう一人の人影に気がついた。

「龍子・・・先生」

「二人は、いつも、お昼はここだって聞いたから、きてみました。仲良しだって聞いたけど、もう今からおしゃぶりの練習してるわけ？」

ぼくの指を口に入れたままの多恵子に、そう問いかける。

真っ赤になって、指を離す多恵子。

「そ、そんなんじゃないですね！ちょっと指切っちゃったから、つい、ペロッて・・・殺菌です！」

あ、先生、高校生に言う冗談じゃないですよ、それ。少なくとも女子に向かっては。

「えへ、ごめんね。でもオープンだって、あたし結構人気あるのよ、女子にも」

はいはい、そのあっけらかんとした色気で男子にも人気ありますよ。

「で、変な噂を聞いたもんだから、ちょっと聞いてみようと思って

ね。あんた達、吸血鬼なの？」

不意を突かれた質問に、呆然となった。なんで龍子先生がそんなこと知ってる？

ちらっと多恵子を見る。さっきは真っ赤だった顔が、今は真っ青だ。でも、誰がそんな噂を？

「馬鹿な噂だと思ってさあ、だって、ほら」

龍子先生が取り出したのは十字架、ニンニク。ぼくはもちろん、多恵子だってそんなものには反応しない。

「聖水は・・・ネタが違うから止めとくけど、ここには日の光。ほら、あんたら、全然平気じゃん。」

なんで、そんな話が出たんかねえ？」

あ、先生、吸血鬼なんて全然信じてないんだ。多恵子がホッとした顔をする。

「あたりめーじゃん。子どもじゃあるまいし、科学の時代に何を非科学的な・・・。あたしは基本的に科学とエセ科学は分けて考える人なの」

はあ、ちょっとは先生らしかったんだ。

「で、申し訳ないんだけど、これからつきあってくれない？学校の外なんだけど、噂の元を確認しに行きたいんよ」

え？学校の中の噂じゃない？どうしてそんな噂が？本当に、確認した方がいいみたいだな。

「でも、先生、学校は？」

「悪いけど、勝手に欠席届出しておいたから。本人の筆跡としか見えないでだから、ばれないと思うよ」

あ・・・この人は・・・でも、外部の噂って、もしかしてアルクの関係者とかなのか？やっぱりほんとく訳にもいかない。多恵子も頷いている。僕たちは先生と一緒に学校を後にした。

先生の車で着いたのはとある、公園。その一角にある建物のエレベーターで地下に降りる。

降りた先にあったのは、まるで、地下神殿と見間違ふような、広大な空間に柱の林立する施設。

「帝都圏域外郭放水路。すごいでしょ」

確かに、スケールが全然違う。こんな施設が東京の地下にあっただなんて・・・

でも、ここが吸血鬼の噂と何の関係があるんですか？

「それはすぐわかるわよ。じゃ、ちょっとごめんね。はい、手、後ろに組んで・・・」

そう言うと、先生はぼくと多恵子の手首をテープのような物でぐるっと巻いてしまった。

ガムテープみたいだけど、ちょっとやそつとじゃ切れやしない。

「ちょ、ちょっと先生？・・・なんですか？これ」

「ごめんね、あたし、教員免許は持ってるけど、あくまで仮の姿だから、先生は」

はあ？何のこと？

「実はあたしの部下ってことです」

冷たい声。ぎよっとして振り向くと、あの女が立っていた。

一重ヶ根 多恵子・3（前書き）

後半の山場・・・になればいいのですが。筆力のなさが致命傷です。

一重ヶ根 多恵子 3

やばい、この女はやばい。あたしの本能がそう言ってる。あたしを見る目が尋常じゃない。

「あんた・・・どっかであつたよな、そうだ、あの岩切場で・・・アルクとやりあつてたヘリの女だ。けっちゃんけっちゃんに負けた、フローレンスとか言ってたよな」

「負けてないわよ!! ぶっ殺すわよ!!」

キレやすいどころじゃない。もう、とつくにキレてる。

あたしは知の陰に隠れるように立つ。

「アルクとはもうすぐ決着つけてやるわよ。それよりあんたたち、アルクに血を吸われた吸血鬼なんだろう?」

え? 驚くあたしと知。

「特にお前、多恵子とかいう女!」

知を突き飛ばしたフローレンスがあたしを掴む。よろめいた知は、周りの男達に捕まってる。

「レポートあがつてんだよ。あの現場で致命傷負って、その後アルクに血を吸われたって。馬鹿正直に書いたもんだから、可哀想に、日本警察の内部で物笑いになったらしいけど。重体にまでなった女がこんなところでピンピン歩けるわけないじゃない。吸血鬼にでもなつてなきゃあね!」

ダメだ。この女、アルクとやりあつてきただけあつて、すっかりわかつてる。

怖い、本当にコワイ。ちびりそう・・・せっかくお気に入りの下着なのに。

で、でも、黙ってちゃダメだ。なんか、反論しないと、

「ち、違います・・・あっ!」

あたしは倒れた。左のほおに痛みが残る。

「止めろ! 多恵子に手を出すな!」

「ふん、吸血鬼には吸血鬼なりのやり方をしないとね、引っ張つていで！」

そばに引っ張られてきた知の手に、刃物が当てられる。

「止めろ！い、いてえ！」

知の悲鳴があがると同時にその手から血が垂れる。

ダメ、見ちゃダメ。見れば、血を見れば、あたし・・・

「ほら、おいしそうな血でしょ？あんたの大好物なんでしょ。遠慮しないで、たっぷり飲めるわよ」

目を瞑ったあたしの顔の前に手を近づける。においがあたしを襲う。あったかく、おいしそうな匂い。

これを飲んだら、いいえ、嘗めるだけでいい、嘗めれば体中に生気があふれてくる。ほしい、欲しい。

体中がほしがっている。のどが鳴る。体が悲鳴を上げる。どうして飲んじゃいけないの？

もう一人のあたしが悲鳴を上げる。

おいしいよ、すごくおいしいよ。あれが飲めるんだら、こんなやつらどうでもいいじゃん。

なんだったら、こいつらの血全部、飲んじゃおうよ。そのくらいの力、あるよ。

ほら、目を開いて、にらみつけてやれば、吸血鬼の瞳の魔力で、もう身動きとれなくなるんだから。

やつちやおう、こんなやつら、やつつけて、飲んじゃおう。

飲み放題、何人分の血かな、たくさんあるよ。さあ・・・

バカ多恵子ー！！！！

誘惑してくるもう一人のあたしを必死で殴りつける。もちろんグーだ。イメージだけど。

蹴りも入れる。踏んづける。頭突きも入れる。悪態をつく。だめ

だ、誘惑に負けちゃだめだ。

知と約束したんだ。知以外の血は飲まないって。

あたしは人だ。

吸血鬼じゃない。まだ吸血鬼じゃない。ここで負けたら、ほんとに吸血鬼だ。

負けたら、もう収まらない、止まらない。

それこそ、全員の血を飲み干すまで、あたしは止まらない。誰にも止められない。

そんなのやだ。人として死にたい。吸血鬼になって殺されるなんて、まっぴらだ。

まして生き続けるのはもったいやだ。

だから、絶対に、ここで負けちゃだめだ！！！！

あたしは必死でフローレンスの顔をにらみつけた。食いしばった歯の間から、

「馬鹿っ」

一言だけ言ってやった。

「おい、もう、そこまでにしておけよ」

聞いたような声がする。あの、警察の人だ。胡桃島・・・さんだったよね。

「これ以上、危害を加えるのならこっちも対応が必要になる」

「わかったわよ」

制止されたフローレンスは不機嫌そのもの。

「ふん、強情な娘なこと。まだ吸血衝動が目覚めてないみたいね、いいわよ、アルクとの事が済むまではほっといてあげる。アルクには、あんた達を捕まえたこととこの場所を知らせてあるから。くるのが楽しみだわ」

フローレンスはそう言い残すと、男達を見張りに立たせて去っていった。

龍子先生・・・いや、龍子も一緒。

胡桃島さんは知の傷の手当てをしてくれてる。

でも、なんか落ち着かない。どこか不安そうだ。

手当を済ますと、あたしをチラッとだけ見て、そそくさとどっか行っちゃった。

「たえこ、多恵子・・・大丈夫か？」

そばに来てくれた知が、心配そうに声をかけてくれる。

「大丈夫・・・へへ、すごい誘惑だったけど、何とか我慢できたよ・・・褒めてくれる？」

自分との戦いに疲れ切った。ほんと、ヘロヘロの気分。

「褒めてあげる。どれだけでも褒めてあげるよ」

アルクを迎える準備だろうか、フローレンスと男達は忙しげに動き回っている。

とりあえず吸血鬼じゃないって思われたのか、監視役は一人だ。

「なあ、多恵子、なんとかしてアルクに連絡とれないか？」

「携帯は持ってるけど、手がこれじゃあかけられないし、すぐ見つかったらうわよ」

「そうなんだ、オレも一緒だけど・・・なんとかしてどこでもいいから連絡して、助けを求めたい」

知のいう、どこでもいい、が・・・ちょっと引く掛かる。

「ねえ、知、あの石切場の火災・・・テレビか新聞なんかでニュース見た？」

「いや・・・全然」

「もう一つ、もしこっから脱出したとしてよ、どこへ逃げる？」

「うん？・・・やっぱ、家か警察かな？」

「じゃあ、ダメよね」

ごめん。冷たい言い方しちゃった。でも、あたしの考えが正しかったら、どっちもダメね。

「どういうこと？」

「さっき、警察のレポート読んだっていつてなかった？組織として、警察と彼女らはつながっているのよ。つまり、どっかへ逃げ込んだとしても迎えにくるのは彼女だってこと。家も一緒よ。地域の警察なり交番なりが結局、連絡を入れちゃうことになるわ。つまり、逃げられない」

「そ、そんな、どっかに良心的なお巡りさんもいるはずだ・・・」

「良心的かそうじゃないかじゃなくて、組織の連絡網がきちちゃってること。あたし達が頼れるのって結局、アルクさんしかないみたい」

知が真剣な顔になる。

「アルクも・・・ダメだ」

どうして？

「あいつは吸血鬼を殺すことが目的だ。自分の過去の清算をするんじゃない。多恵子に吸血衝動が現れていることがわかったら、絶対に多恵子を殺す。つまり彼女も頼れない」

八方ふさがりってことね・・・

「ふさがっているかもしれないけど、手を拱いていてもしょうがない。何とか、二人で何とかしよう」

さとり・・・

「巻き込まれてばかりいるのも不本意だし、力を合わせればこの局面、打開できると思う。がんばろう」

うん。・・・さとり、ありがとう。でも、あの約束、忘れないでよね。

「ああ、忘れてない」

一重ヶ根 多恵子・3（後書き）

一重ヶ根多恵子さん、最初のアイデアでは、あなたは知を強くするためにアッサリと殺される恋人役でした。恋人を殺されて復讐するために強くなる・・というパターンの。

それがまあどこがどうなったことやら、すっかり主役を食ってしまふような活躍ぶりを発揮してしまいました。おかげで知のへたれはちつとも直りませんが。でもあなたがいたおかげで楽しく書くことが出来ました。感謝

一重ヶ根 多恵子・4（前書き）

多恵子さん語り口はこの11話目で終わり。よくここまで続いてきたなど。

もうとつくに記録更新の長い話しになっています。

あと、もう少しで完了です。

お読み下さってありがとうございます。

一重ヶ根 多恵子・4

でも、現実には厳しい。単なる高校生が何とかなるほど甘くはない。両手を縛っているテープはきつついし、監視役は目も離さない。・・・ふっと空気が変わった。知が周りを見回す。

「アルク・・・？」
来たの？

「あ、なんか、甘いにおいがしたような気がして、彼女の香りじゃないかって・・・」

そう言ったとたんに、彼女が現れた。物陰からふわりと実体化する感じ。

「アルクさん・・・」

彼女は片手をあげて、あたし達をとどめる。

「ごめん、センサーの罫でいっぱいなの。簡単に助けられない。一歩でも動くとワンワン鳴く仕掛けみたい」

「アルク、見張りはどうした？さっきまでそこにいたはず」

「あたしの魅力的な瞳でノックダウンよ。ま、2、3日は意識がcaeってこないでしょうけど。しょうがないから、あいつらの所へ顔を出してみるわ。どういうつもりかってね」

彼女はそう言うと、あたしの顔を見る。

「多恵子？」

え、は、はい。

「何か、雰囲気変わったわね。匂いかしら・・・あなた、まさか覚醒したんじゃない？」

彼女の顔が見られない。目を合わせたら、ばれてしまう気がする。

「いいわ、事が終わったら、じっくり話しましょうか」

「アルク！」

知が呼びかける。

「なんで、ここに来た？助けてくれるつもりなのか？それとも消す

つもりなのか？」

「そうね・・・たぶん、単なる退屈しのぎじゃないかな」
そう言うとな彼女は消えた。

しばらくすると周りが騒がしくなる。

ホールを中心に腕組みして立っているのはアルク。向かい合うように離れているのはフローレンス。

「もういい加減止めてよね。あたしもあの子達も解放しなよ」

「うるさい。前も言ったけど、死んでもあんたを追いかける」
やれやれ、両手を広げて肩をすくめる。

「そんなキザなポーズもこれで最後よ。龍子、やって！」

その声とともにホールが青い光で満たされる。微かなチャントが響いている。

アルクの顔に驚きの表情。

「え・・・うそ、動けない、・・・そんな、どこにも魔法なんか・・・ないはず」

「頭の上、上を見てよ」

そこには青い輝きを放つ巨大な魔法円。銀色に輝く不思議な模様が描かれている。

「いっつも足下にしかないなんて思うのは油断よね。これで魔物であるあなたの動きは封じたわよ」

そう言っている間にも、まるで上から重しをかけられているかのように、アルクは膝を折り、両手を床に着く。

「く・・・ちくちよう・・・卑怯だ・・・不意打ちなんて・・・」

「何とでも言っで。あんな、なんて気持ちのいい言葉なこと。動けないアンタから血を抜くなんて、すっごいずるくて、うれしいんだけど。あ、心配しないで。一滴残らず搾り取ってあげるから。ミイラみたいになっちゃうまでね」

「多恵子、アルクが捕まった!」

わかってる。でも、どうやって助けたいの? あたしに力があつたら、力、チカラ、ちから!?

トクン。

やけに大きく心臓が鼓動した。

トクン、トクン、トクン。

脈拍に合わせて、体中が反応する。全身がなにか、不思議な力に包まれたような、奇妙な感覚。

あれ? いつ切れたんだろう。両手が自由になってる。

さっきまで手首を縛っていたテープが散り散りになって落ちていく。

知のテープも簡単にちぎってあげる。うわあ、なんかすごい力持ち? あたしって。

「あたし、アルクさんを助けに行く」

「そんな、あのアルクでさえ、今捕まっているだぞ」

「だからよ。アルクさんに助けてもらった命だから、今度はあたしが助けなきゃ。危ないのは承知の上」

あたしは知に顔を近づける。

「仲間、見捨ててるんなら、人じゃないよね?」

「う、うん……なら、オレも仲間だ。オレも助けに行く」

待ってて、まずはあの呪文を止めてくるから。

ぴょんと跳ねる。ふわっと身体が浮く。体重も減ってきているけど、感覚が前と全然違う。

一步が何メートルも飛んでいくような。

ひよいひよいと飛び越して、周りを見る。詠唱の元、ああ、あそこだ。

龍子先生が、衣装に身を包んで、一生懸命炎の前で唱えている。

ううん、龍子、覚悟して。今、あたしが行くから。

音もなく、彼女の背後に着地。襟首を掴んで、ひよいと後ろへ。キャンと悲鳴を上げると、彼女はすっ飛んでいった。

ついでに護摩壇もぶち壊しておいてあげた。

「多恵子・・・一重ヶ根、多恵子！」

まだ何が起こっているのかわからずに混乱している声。

あたしはゆっくり振り返ると、見つめてあげる。力がみなぎっている。

きっと、あたしの瞳は金色に輝いている。

「や、やっぱり、あんた、吸血鬼！」

ピストルを取り出す。ふーん、そんな物持ってるんだ。

感覚を高める。弾丸がゆっくりやってくる。

この前、これをよけ損ねたんだけど、もう、大丈夫ね。回転しているのさえ見える。

髪の毛を1本、動かす。強度を上げた先端を弾に絡める。

絡まったら、ひよいと動かして、プチンと切れば・・・ほら、逸れていった。

そうか、この前、アルクさんはこうやって弾丸を防いでいったのね。もう、わかった。簡単。

髪の毛はたっぷりあるし、切ったところはすぐに再生できる。ほんと、無限の盾。

撃ち尽くして弾切れ。武器ってほんと、不自由だね。

あたしは彼女の懷に飛び込もうとした。すかさず彼女は不可思議な指の動き。

身体に衝撃が走る。足が止まる。

「九字護身術。あんたにも有効みたいね！」

飛ぶ、見えないところへ、死角へ回り込む。もう、九字は切らせない。

遅い、遅い！そんな動きじゃ、あたしのスピードに勝てない。

あたしの人差し指が彼女の喉を捕らえる。いつの間にか細く、長くなった爪を喉もとに突きつける。

「魔法円、解放しなさいよ。それともこのまま喉を突き破って欲し

い？」

彼女は唇をかむと、呪文を詠唱する。青白い光がやむ。アルクさんが立ち上がるのが見える。ホッとしたとき、油断があった。

彼女が何か唱えていた。さつきと調子が違う。違和感が身体を襲う。

次の瞬間、頭の上の魔法円が真っ赤になって崩壊した。

コンクリートの破片が頭の上に落ちてきた。

大したことはないけど、塵と埃で周りが見えなくなる。

ようやく、周りが見えるようになったとき、そこには見たこともないような怪物どもが溢れていた。

な、なによ、これ？ あんた、一体なにをしたの？

「召喚よ、魔物の召喚！ こんな、うまくいくなんて、初めて成功したわ！」

喜んでいるのですか？ あなたは、この事態を？

「初めて出来たんだから、嬉しいわよ。再現性があれば、もう魔術じゃなくて科学よ、これは！」

わかったから、返してくださいな、この連中を。

「できません。呼ぶのがやっとできたんだから、返すなんて方法、知りません」

その無責任な発言に思わず、グーの拳が飛んだ。ぶっとばされた龍子は目を回してひっくり返る。

目一杯の速度で知の所に戻る。行きがけの駄賃で魔物を一匹屠っておく。あたしの爪も有効みたい。

知だけじゃなかった。胡桃島さんの他にももう一人いる。

三人で力を合わせて・・・っていうより、隠れていたってとこね。「なんだ、これ、いったい何が起きたんだ？」

馬鹿が一人、後先考えないで召喚しちゃったのよ。しかも戻せな

いですって。

「ここで全部やっつけないと、一匹でも外へ出したら、東京は壊滅だ」

でも、あたしとアルクさんの二人だけでこれだけ全部やっつけられるかなあ？

ちよっと相手が多すぎるよ。

もう一人の人、有道さんっていうんだ。この人と胡桃島さんが外と連絡とってる。

出入り口を完全封鎖するって。

確かにそうすれば最悪の事態になってもこの中だけの被害に収まる・・・のかなあ？

魔物って、ドアぐらい破れるんじゃない？やっぱりこの中で全滅させないと。

「これ、使えるのかな？」

知が取り出した1本の剣。さやから取り出すと、光が・・・ダメ！それ以上、見せないで！！

体の力が抜けそう。膝がぐくぐくする。

さっきまでの高揚感がすっかりどこかへ行ってしまったている。

いったい何なの？その剣・・・？

「アルクが貸してくれた、魔物封じの剣って言ってた。魔物にしか効かない剣だって・・・」

そっか。今のあたしは吸血鬼だから、効いちゃうんだ。

アルクさんも持ってるだけで使えない剣だから、知に渡したんだ。

「これを使って、オレも魔物退治に参加するよ。二人に任せて逃げるなんてイヤだからな」

でも危ないよ。

あたしやアルクさんと違って、知は人間なんだし、傷の回復だって早くないし、運動だって・・・

「うるさい！全部負けてるけど、いいとこないけど、でも何か手助

けしたい！役立たずはイヤだ！」

そうね、いいよ、じゃあ、あたし達はこの手でやろう。ほら、アルクさんも始めたみたい。

ホールの中心では不思議なダンスが始まっていた。

でも、知、始める前に、少しだけ・・・血をちょうだい。

一重ヶ根 多恵子・4（後書き）

まあ、多恵子さんがいきなり知をグーで殴ったときから、「あ、この子、主役を食うな」と予感しましたが、やはり・・・あのあたりから、シビアな話しのつもりがラブコメに変わっていきましてからね・・・いえいえ、多恵子さんが悪いのではありません。全て作者の妄想ですから・・・

アルクライム・レ・ファニユ・ 3 (前書き)

いよいよ大団円ってところです。クライマックスらしくないかもしれません、まあ、大目に見てください。(汗)

アルクライム・レ・ファニユ・3

やれやれ・・・

魔法円が耐えきれずに崩壊する、その直前、一瞬のことだったけど、その瞬間に召喚が行われた。

破壊しちゃうのは訳わかんないけど、召喚そのものはまあ、成功なんだし、現代にもそれなりに腕のある魔術師がいたんだね。

でもまあ、こんなの呼んじゃって、いったい後始末はどうするつもり？

やるしかないわねえ・・・ああ、面倒くさい。でもしょうがない。ほら、魔物達はまず人間を襲う。血を吸い肉を食らう。餌だもんねえ。あ、一人、やられた。

あたしに気がつく奴らもいるけど、匂いが似ているからなんか、戸惑ってる。

人か、仲間か？そんな感じ。

でも、だんだんとあたしに牙を向けてくるんだろうなあ。

多恵子が動き回っているのは感覚で感じるけど、とうとう覚醒しちゃったみたいね

・・・これも後が大変だな。

ま、まずは魔物どもから片付けていきましょうか。

ステップを踏む。右足を出し、左足を跳ね上げる。

手を回し、胸を反らし、頭を巡らす。髪がふわりと回る。

慌てないで、ゆっくり、ゆっくり。遙か昔、教えてくれた先生の言葉を思い出す。

リズムを刻む。ビートはまだゆっくり。しなやかに、しなやかに。足を動かす。それについて行くように、上半身が、手が、頭が動く。

邪魔ね。ダンスの邪魔するやつは・・・ほら、消滅した。

接触の一瞬に、手や足や髪が接触する、その一瞬で狩る、屠る、消え去る。

気がついた奴らが、あたしの周りに群がってくる。ほら、どんどん来なさいよ。

ダンスは止まらない。踊りはだんだん早く、ステップは細かく、大きく、複雑になっていく。

ジャンプも組み合わせる。ほら、そんなところにいると、邪魔よ。消えて、消えて。

魔物の腕をかくぐる。足は躲す。腰を折り、のけぞり、サイドステップ。

相手の攻撃は全てかわす。

寄ってくればくるだけ、どんどん消していく。あたしのまわりに空白が出来る。

ステップで移動する。

繰り返す、繰り返す。それだけ消える。ちょっと汗ばむくらいだけど、いい運動。

おいで、おいで。

一緒に遊ぼう。あんたたちは一瞬で消えちゃうけど、あたしは遊び。ほら、楽しいよね。

黒い影が視界をかすめる。ああ、多恵子だ。

魔法円が壊れるときも彼女がなんかやってたみたいだし・

速い、速い。まるで影ね。あたしの古風なダンスとは全然違って今風ね。

あたしが円なら、彼女は直線。まるで黒の稲妻。

あの光？あれは懐かしい・・・そうか。知か。

彼もあの剣を使い始めたのか。あれは人にしか使えない。魔物封じだもの、魔物は持てない。

でも、魔物相手なら無敵でしょ？三人がかりなら、うん、もっと

楽しくなる。

ああ、あの二人、呼吸が合ってる。多恵子が飛ぶ。魔物の注意を引きつける。

知が忍び寄る。突き刺す。消す。

知に注意が向けば、多恵子が背後から襲いかかる。ああ、ナイスコンビネーション。

おっと、そっちばかりに注意がいくと、危ない、危ない。でもほら、消えた。もう大丈夫。

三人、仲間で、一緒になって、遊ぶのはとても楽しいよね。

あんなにいたのに、どんどん少なくなっている。もう少しで終わりかな。

二人に合図すると、あたしはダンスを止める。

さて、元を断ちに行かないといけないよね。これはあたしの義務。あたしの責任。

二人が最後の魔物を消滅させている間に、あたしは周りの確認。

ほら、いた。物陰に隠れて。まあ、ブルっているじゃない。おもしろいまでしちゃったのかしら。

かわいいところあるのね、フローレンスったら。

「う、うるさい！・・・あたしはこんなことまでは予測していなかっただけだ」

きつと初めて核爆弾を作った人も、同じようなことを言ったと思うわ。

さ、フローレンス、もう本当に終わりにしましょう。あなたの本音が聞きたいわ。

「や、止める・・・止める、あたしを見つめるな！」

でももう遅い。あなたの目はあたしの瞳から離れない。

あたしの金色の瞳があなたをとらえて放さない。

ほら、じつくりと覗き込んで、心の底、そこにいるあなたが知りたい。

さ、どうしてそんなにあたしを追いかけるの？単に命令というだけじゃないでしょう？

「・・・お前を初めて見たのは、あの村。あの村には弟がいた。医者だった。変わった患者が来たと言っていた。とてもおとなしくて人当たりがいいのに、時折恐ろしく凶暴になると。」

当時、あたしはもうお前の事を知っていた。あの飛行機事故の後、どうやって生き残ったのか、どうやって一瞬で10人を殺したのか、誰なのか、知りたかった。機密情報をあさった。吸血鬼の噂と名前を、アルクライムの名前だけ知った。

弟の話が来たとき、直感でその患者は吸血鬼の一人じゃないかと疑った。すぐ行く、用心しろと伝えた。

でも、着いたとき、村はなかった。全ては焼け、人一人いなかった。死体さえなかった。そこにいたのはただ一人の女性が立っただけだった。アルクライム、お前だった。

その瞳が忘れられない。暗闇で、赤い炎を写しながらも金色に輝いていた。でも、悲しげで切なげで、あんな瞳は見たことがなかった。忘れられなくなっていた」

弟さんの復讐なのね。吸血鬼はすべてあたしが元だという・・・しかし、彼女は首を横に振った。

「あたしはお前を追った。使える物は何でも使った。必要なら金でも力でも、身体さえも使った。」

最初は自分でも復讐だと思っていた。でも、違うことに気がついた。なぜだか最初はわからなかった。でも、でも・・・

・・・あたしはお前に恋い焦がれている。お前を愛している。お前を知りたい。自分の物にしたい。あの瞳を独占したい。

それが叶わないのなら、誰にも渡したくない。他の人にあの瞳を奪われたくない。

お前と一緒にいたい。吸血鬼になりたい。永遠にお前のそばにいた

い。

どうしてあたしの血を吸ってくれないのか。どうすれば吸血鬼にしてくれるのか。

他の人間は吸血鬼にするくせに、どうしてあたしに振り向いてくれないのか。

お前を支配したい。お前に支配されたい。

こんなに、こんなに夢中なのに、どうして気がついてくれないのか。ならば殺す。誰にも渡さない。

さもなくば、殺して欲しい。永遠に叶わぬ恋ならば、あたしを殺して・・・」

そう、それがあなたの本心なのね。わかった、わかったわ。

今までお相手をしてあげなかった報いなのね。

さ、願いを叶えてあげる。あたしに血を差し出しなさい。ほら、その細い首をさらけ出しなさい。

いい子ね。さ、天国に行かせてあげる。

「あ・・・あ、ああ、あっ」

ほら、すごいエクスタシーでしょう。今までこうやって何人が恍惚の瞬間を迎えたことか。

フローレンス、あなたもその仲間に入ったのよ。うれしいでしょう。

「ああ・・・すばらしいです。こんな、こんな喜びがあるなんて・・・」

多恵子、ごめんね。どんなにすばしいか、知らないって、顔してる。

だってあなた、死にかかっていたんだもの。無理言わないで。

さ、吸血鬼の血があなたの中を駆け巡るのがわかるでしょう。

どんなにすばしいか、実感できるでしょう。

これであなとも望みどおりの吸血鬼よ。もう一つのあなたの望み

も叶えてあげる。

「はい・・・え?・・・」

これでもう悪い夢を見ることはないわ。
右手の爪を心臓に突き差してあげる。

「ア、アル・・・!」

彼女は声を上げ・・・消滅していった。

声の残りと服だけがこの世の物。でも声もすぐに消えていった。
これで一個、因縁が消えたわ。

ああ、もう一つ、因縁が残っていたわね、多恵子。

アルクライム・レ・ファニユ・3（後書き）

謝辞。

Moonlit Archives 真月譚 月姫 Origin
all Sound Track 1

このCDがなければこの作品は無かったと思います。もちろんこのCDはアニメ版真月譚月姫のsound track なのです
が、このすばらしい音楽が私の文章を導いていってくれたような気がします。個人的には最高のBGMだと思っています。感謝です。

アルクライム・レ・ファニユ・4（前書き）

ほぼ、完結・・・ですね。残りはエピローグだけとなりました。
お読み下さいまして、ありがとうございます。

これだけの長い話しは初体験です。よくたどり着いたなど、ちょっと感心。

前の分を読むと、読みにくいところとか、分かりにくい点とか多いですね。

反省点です。

あと1話の辛抱です。明日、この時間ぐらいに投稿します。では、最後まで楽しんでいただけると有り難いです。

アルクライム・レ・ファニユ・4

知、約束、破ったわね。

できるだけ冷たく響くように低い声で話す。感情を込めないで冷酷に感じるように。

多恵子に吸血衝動が現れたのなら、すぐに連絡をよこしなさいって言ったはずよ。

知は何も言わない。認めてるのね。

でも、今までと違うところ、それは多恵子をかばうように立っていること。

へえ、少しは男になってきたのね。

ねえ、多恵子、血を嘗めたときの感覚、言ってちょうだい。どんな風に感じたか。

その言葉を聞いて、多恵子はゆっくりと話す。

「・・・全身が生き返るような、体中の細胞が一気に活性化したような、そんな気分でした」

血のにおいはどう？ 凄く敏感になったでしょう？

「・・・はい。彼が指を切ったとき、その血の匂いがしただけで、あたし、気が狂いそうでした。

欲しい、吸いたい、そんな気持ちで一杯でした。

この血を嘗めたら、体中が生き返る。

元気になれる、そう思うと、どんなことをしてもかまわないから、欲しい、そう思いました」

ほら、これが吸血衝動よ。

どうして見境無くなるのか、どうして吸いたくてたまらなくなるの

か、わかったでしょう。

多恵子は頷いている。

「私は、このまま、吸血鬼のままですか？ アルクさん」

さあ、・・・多分、たぶんだけど、そうだと思うわ。

「でも、アルクさんも吸血鬼ですよ。アルクさんはどうやって吸血衝動を抑えているのですか？

あの喜びを、血を吸ったときの体中の喜びを一度でも経験したのなら、

抑えきれないと思うのですけど」

あたしも吸血衝動は常時感じてる。ただそれを心の力の大半を使って抑え込んでいるの。

だから、怒りとかで自分を抑えきれなくなったときには、吸血鬼が表に出てしまう。

「あたしもそうなりますか？ この吸血衝動を抑えられるようにはなれませんか？」

わからないわ。体質、精神力、経験値、いろんな要素がありそうなもの。

それに頼って吸血鬼を野放しというわけにも行かないわ。

始末が一日遅れた、村の話、したわよね。あの村のように、一瞬でも始末が遅れれば、

その分、被害は甚大なものになるですもの。大事を取りたいわ。

「・・・では、私は殺されなければならないのですね。フローレンスと同様に・・・」

「ま、待って。待った、アルク！」

知があたし達の割って入る。

「まだ多恵子は人間だ。だから殺させない。」

それに多恵子はオレに殺してくれって頼んだんだ。この約束は守る。守りたい」

無理よ。単純明快な答えに、笑みがこぼれる。

人を殺したことがあるの？ないでしょう。あなたにとっては多恵子はいつまでも人間よ。

吸血鬼になっても人間よ。だからいつまでも多恵子を殺すことは出来ないわ。

そして殺した後も多恵子が現れるの。何度でも何度でも。

顔が見えて、声が聞こえるの。どうしてあたしを殺したのって。いい？これは多恵子の幽霊なんかじゃなくて、あなたの心の問題なの。

そんなことまで分かっている、あなたに多恵子を殺させることなんて、できないわ。

「じゃあ、アルク、お前にはできるのか!？」

あたしの両手はとくに鮮血で汚れきっているわ。

これに多恵子の血一つ加えたってどうってこともない。

そう、あたしは血まみれ。拭いようがないぐらいに血だらけの女。

「・・・お前の心もか」

あたしは吸血鬼よ。良心なんか、求めないでよ。

「知くん、・・・あたし、もう覚悟はできてるよ」

知の後ろに立っていた多恵子が泣きそうな声でそうささやいた。

「短かったけど、すごく楽しかったよ。だから、もう満足してるから・・・」

アルクさんに助けてもらった命だから、アルクさんにお返しするだけだから。お願いします」

多恵子はあたしの前に向こう向きで立つ。もう、知は泣きじゃくっている。

あたしは背中から前に手を回す。多恵子の胸のふくらみの前。心臓が手の下にある。

多恵子の手があたしの手に添えられる。脈動が共鳴する。本能的に彼女の血を分析する。

彼女の血、そしてあたしの血。

それと後、微量だけど・・・知の血？あたしが知っていると云うことは。

この子の血はきれい。他の物は混じってないじゃない。

知の血しか飲んでないの？そう聞くと多恵子は頷いている。

「約束したんです。知の血しか飲まないって。彼が血を分けてくれるから、それだけで満足しろって。

血を突きつけられたとき、ほんと、必死で闘ったんですよ。

他の血も飲んじゃおうっていう吸血衝動と。むちゃくちゃ強かったんですよ。

もう、知なんかと約束しなきゃよかったっていうぐらいに」

あたしは多恵子の髪に顔を埋める。

目が熱くなって、ほおに伝わる。これは・・・涙？いつ以来？

「アルクさん・・・？」

この子は告白できた。自分が吸血鬼だと恋人に言えた。あたしはどうだったのだろう。

この子は恋人から支えてもらった。あたしは支えてもらえなかった。何が違ったのだろう。

この子は血まで分けてもらっていた。だから他の人の血はいらなかった。我慢が出来た。

あたしは・・・我慢できなかった。なぜ？

あたしにも最愛の人がいた。でも言えなかった。

吸血衝動が起きたときも、その後も吸血鬼だと告白できなかった。

怖かった。愛を失うことが恐ろしかった。

愛していればこそ、愛されなくなることが怖かった。

吸血鬼だと告白すれば、まわりの見る目がどうなるのか怖かった。あの人の、あたしを見る目がどうなるのか、恐ろしかった。だから、言えなかった。

結果がどうであろうと、言えさえすれば・・・そして、言えなかったあたしは地獄に堕ちた。

あたしは嘆いた。罵った。叫んだ。泣いた。でも、言えなかった。あの人に抱きしめて欲しかった。それでも愛してるって、言っただけだった。

でも、告白できなかった。

他人を責めた。医者を呪った。吸血鬼を罵倒した。でも、あの人は言えなかった。

吸血鬼に堕ちたんじゃない。あたしは自分の心の弱さに堕ちたんだ。心の闇に堕ちたんだ。

失うことへの恐れからさらに堕ちた。絶望や恐怖から逃げようとしてもっと堕ちた。

堕ちる事への恐ろしさから人でなくなるところまで堕ちた。

・・・心の底から、あの人の愛を信じて、告白することが出来なかった。そして最愛の人まで殺した。

止めどなく後悔の涙は流れていった。どうしようもなく肩が震え

る。

多恵子はそんなあたしの両手をいつまでも握りしめてくれた。

ダメ。あたしにはこの子は殺せない。

いっそとことん吸血鬼になりきってくれた方がまだ殺せるわ。

泣き疲れたあたしはそう二人に告げた。

この子はあたしの理想。吸血鬼でありながら人、人ながら吸血鬼。愛も知ってる。

そしてそれ故に吸血衝動も抑え込める。

この子に少しでも近づきたい。ぎゅっと彼女を抱きしめる。

あたしも仲間に入れて。

あたしはボソツとつぶやいた。

多恵子、あたしと一緒に行く？ 歳、とらないから一箇所にいると、
どんどん居づらくなるわよ。

答えはわかっているつもりだけど、一応礼儀として聞いておくわ。

多恵子は首を横に振る。そうよね。知と一緒にいて、知に守って欲しいよね。

「無理だと思うけど。」

実際、吸血鬼になる前からお前の方が強いし、今はもう圧倒的に
お前の方が強いよ」

「バカ」

そう言う多恵子を抱きしめて、知が言う。

「なあ、アルク、考えたんだけど、もし、この吸血衝動が病気だとしたら、

遺伝子レベルかなんかわからないけど、感染を引き起こすなら、
なんらかの病気だと思えられないか？

もし、そうなら、治療法だってこれから見つかるかも知れない。
いや、オレが見つけたって良い。

もしそうになったら、多恵子も元に戻る可能性があるんじゃないか？」

・・・そうね、二人とも若いんだし、その可能性はあるかもね。

「なら、オレ、これからがんばって多恵子の治療法見つける。

うまくいったら、あんたも直してやる。人間にしてやる！」

・・・ふふっ、ありがと。一応、覚えておくわよ。吸血鬼は気が長いから。

さっきから呆然と見てるだけのお二人さん、胡桃島さんと有道さんだっけ、

お二人さんにはお願い。この子達を見守ってやってくださいな。

あたしはもう行かなきゃならないから、もう、ここには居られないから、

この子達の保護をお願いします。

この二人は日本国民なので、国を代表して保護します、と二人は答えてくれたけど、

まあ、官僚ってのも結構冷たいし、平気で裏切ることもあるからね。ほどほどに信用しておくわ。

でも、なんかあったときには、覚悟しておきなさい。

知、多恵子。もし、なんかあったら、連絡ちょうだい。

地球の反対側に居たって、すぐに飛んでくるからね。知、いい？必ず連絡くれるのよ。いいわね！

この前みたいにサボったら、容赦しないからね。

知、あの剣はあげる。多恵子に何かあったら、約束、守ってあげ

てね。

アルクライム・レ・ファニユ・4（後書き）

ほぼ完了したことから、佐々木少年さんの「月姫」、読み始めました。

読めば絶対に影響を受けてしまうと思って、書き上げるまでは読まない！と誓い。

おゝ、苦しかった。多恵子並の我慢でした。

解放されました。快感！！

じっくりと自分の世界と比較しながら読みたいです。では

エピローグ（前書き）

話としては前でほぼ終わりです。これは付け足し。なんか中途半端な終わり方に感じたので、付け加えました。

エピローグ

なんだか、ウソみたいだね。

「ホント、夢だったのかなって感じ」

お昼休み、僕と多恵子は屋上で昼食後の談笑。

正確には僕には談笑だけど、多恵子にはデザートの時間。

多恵子のデザートはちよつと傷つけた僕の指先を嘗めること。

満足するほど飲むと超人的運動能力を発揮してしまうため、嘗めるぐらいでいいらしい。

僕が貧血になるかも知れないけど、そこは多恵子が料理で栄養補給してくれている。

実は血を嘗められているところをクラスの奴らに見られてしまった。

ヤバイと思ったのだが、最終的に「二人の愛情表現」ということで落ち着いてしまった。

まあ、誰が今時吸血鬼なんか信じるかってとこだけど。

それからは教室でも時折、指しゃぶりしている。

吸血鬼が隣にいて、血を嘗められているのに、教室にいてみんなとしゃべってるといのが、

ますます現実感をなくしている。

「結局、あの剣は没収されなかったの？」

胡桃島さんに見てもらったら、子供のおもちゃだってさ。

日の光の中ではあの剣の輝きはわからないし、紙さえ切れないんじやあおもちゃだな、確かに。

おもちゃは銃刀法違反にならない。よって没収しない、だってさ。だから、ずーっと護身用に持ち歩いているよ。

「あたしとの約束、守るためにね」

一生、守らなくてもいいようにしてよね。

「龍子先生・・・龍子さん、結局見つからなかったよね」

見つからなかったということは逃げてるよ。逃げ足速そうだったからねえ。

「魔術師としては結構いい線いってるってアルクさん、言ってたね」
どっかで子供だましの祈祷師みたいなことやって、小銭かせいでるんじゃないかな。

急に先生が一人、消えちゃったから学校はてんでこまいったけどね。

「アルクさん、今どこかな？」

うーん、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ？わかんないなあ。

吸血鬼伝説って世界中にあるみたいだし。

「全部彼女から拡がったのかしら」

魔物からも拡がった部分もあるかもしれないし、全部彼女って訳でもなさそうだけど、

でもずーっとお掃除、するつもりなんだろうね。

「それが生きがい？・・・なんかちょっと淋しいな」

できることなら、魔物と一緒に自分の過去も消したいんじゃないかな。

もちろんそんなことはできないんだけど。生きている限りつきあっていくしかないんだよね。

「でも、あの後おもしろかったよね。有道さんだけ、外務省の人とアルクさん、やりあってたよね」

出国手続きを認めるの、認めないのってか。

「トラブルの原因が出国するんだから、超法規的に認めろ、だったよね」

入局管理局でやってくれたの、横やり通せだの、あのやりとり、笑っちゃったよ。

「あの無理を通す勢いは見習わないといけないなあ」

「そういやあ、あの施設、今度改修にはいるらしいんだ。HPに出た。

「へえ、この前だいぶ壊したからかなあ？迷惑かけちゃったね」

それがね、有道さんの話だと、外務省だの、警察だの、国交省だの、いろんなところが

どこが修理費用を持つかって、もめにもめたんだって。

「アルクさん、お金出しても良いって言ってなかった？」

うん、その時はアルクって金持ちだなーって感心してただけなんだけど、

結局、受け入れる先がわからないってことでもらわないみたい。

「バカみたい」

役所って賢ぶってるけど、要はおバカの集まりかもね。

「おバカって言えば、うちのお母さん、馬鹿してたわ」

あの日、二人そろって行方不明になったって、警察に届けて大騒ぎしてたってやつか。

「二人して外に出たら、まあ、警察はいるわ、親戚、学校、友人、近所の人まで押し寄せてきて・・・」

胡桃島さんにフォローしてもらおうと思ったら、管轄が違うとか言って逃げちゃうし・・・

「お母さん、ほんとに駆け落ちしたって思ってたみたい」

まだ妊娠説を信じてるの？

「妊娠しても認めるから、駆け落ちなんてしないで、って泣きつくんだもの、こっちがびっくりよ」

妊娠して欲しいみたいだね。

その噂だけ拡がって、とうとううちの親の耳にはいつてさ、男ならちゃんと責任取りなさい、って言われちゃったよ。

「あは、うちと一緒だね。でも、うちのお母さん、その後にもう少し付け加えたわよ」

へえ、なに？

「女の子はちゃんと安全日かどうか計算しておきなさい。危険日はきちんと伝えなさい。

下着は清楚で、ちょっとセクシー系なのにしておきなさい。

そして、チャンスは逃すんじゃないやありません、ですって」

……え、えっとそれって……どういう意味？

多恵子はスツと顔を寄せてきた。僕の目の前に多恵子の顔。

ちよっとおもしろがっているような、馬鹿にしているような、不思議な瞳。

吸血鬼モードじゃないのに、キラキラ輝いている。

「知らない。バカ」

そうささやいて抱きついてくると、唇を重ねてきた。しかも舌まで入れてくる。

驚いた拍子に後ろに倒れると、多恵子はそのままのしかかってきた。多恵子の軽い体重を身体で感じながら目を開くと、青空の中、飛行機が飛んでいくのが見えた。

おまけ。多恵子とアルクのイメージ。(笑)

アルクは全然似ませんでした。難しい……

>i19519—2608<

N o r m a l E n d f i n i s h e d .

エピローグ（後書き）

お読み下さった皆様、深く感謝いたします。
ありがとうございました。

また、どこかでお目にかかれれば幸いです。
では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1521r/>

Another MOON

2011年3月10日14時03分発行